

第5章 洗島1号墳

調査区内の段丘端部には方墳と思われるマウンドが存在しており、平成2年度に行われた範囲確認調査では測量と断ち割り調査が行われている。ただ、この時の調査では古墳と断定するまでには至っていない(小林1991)。今回の調査では主体部は確認できなかったものの、墳丘及び周溝が確認できた。このため、洗島1号墳と命名して区別して報告する。

1. 墳丘 (第33図)

A. 調査前墳丘状況 (第33図)

調査前の墳丘の状況であるが、調査区内の樹木の伐採のために旧状が若干変化していた。このため平成2年度確認調査時の測量図を基にして説明を行う。

古墳は段丘崖に接するように、柿畠のなかに位置していた。墳丘は雑草で覆われており、樹木は雑木が若干生えている程度であった。測量の結果では、標高の最高点は14.9mであり、コンタが方形に巡ることから一辺が6.5mの方墳と考えられた。墳頂と墳裾の比高差は最大で1.0mと低い。地形からは周溝の存在は確認できなかった。

平成2年に行われた範囲確認調査は、墳丘方向に合わせて北東-南西方向にAトレンチ(幅0.5m、長さ9.2m)、北西-南東方向にBトレンチ(幅0.5m、長さ8m)の2本のトレンチを墳頂で直交させて設定している。調査は墳丘を地山まで断ち割っている。盛土中から縄文土器、弥生土器、須恵器が出ているが、古墳と断定する資料は得られていない。

B. 墳丘 (第33図)

今回の調査では、平成2年度のトレンチを探す作業から行った。十字状のトレンチを再発掘し、その断面から土層を把握した。土層から墳丘の基本的な築造工程をみよう(第33図墳丘土層参照)。まず黄褐色粘質土層(第33図1)の地山上に約25cmの厚さで黒灰色砂質土層(第33図2)が堆積している。この層からは縄文土器、弥生土器、土師器など古墳築造以前の遺物が出土し、この層が築造時の表土であったものと考えられる。その層上に黄灰色砂質土層(第33図4)が厚さ30cm程に敷き詰められている。平成17年度に調査を行った古墳時代前期の西側北1号墳も同様な構造をなしていたが、この層上に木棺が直葬されていた。しかし、洗島1号墳ではこの層上から墓壙等の遺構は検出されていない。この層の上には茶灰色砂質土層(第33図5)が盛られ、その上に灰色砂質土層(第33図6)の表土が堆積している。表土からは古墳に伴う可能性のある須恵器・甕が出土している。簡単に述べれば、旧表土を黄灰色砂質土層で整地して、その上に茶灰色砂質土層で盛って墳丘を築造している。

墳丘の調査は、旧トレンチで十字に割った墳丘の西側・東側を先行して地山まで掘り下げた。墳丘内では遺構は確認できなかったが、地山面で中世以降のSD-3・4などの溝や大型土壙が確認され、現状で残っている墳丘は、後世の溝によって規模が縮小されていることがわかった。また、古墳南側

は火葬墓があり、墳丘端にはS Z - 3の火葬墓も検出されている。墳丘を壊して造られていた大型土壙も火葬墓または土壙墓である可能性がある。おそらく、古墳南側は中世～近世の墓域であったものと思われ、実際に墳丘南側の表土からは仏飯器などの宗教用具が多数出土している。墳丘は溝で縮小されたり土壙が掘り込まれるなど、後世の改変が著しい。主体部は確認できなかったが、本来は主体部に埋葬されていたと考えられる鉄製品も周溝埋土から出土していることから、主体部も部分的に土壙等で壊されている可能性が考えられる。全体的にみて墳丘の遺存状態は悪いものと思われた。

C. 周溝（第33図）

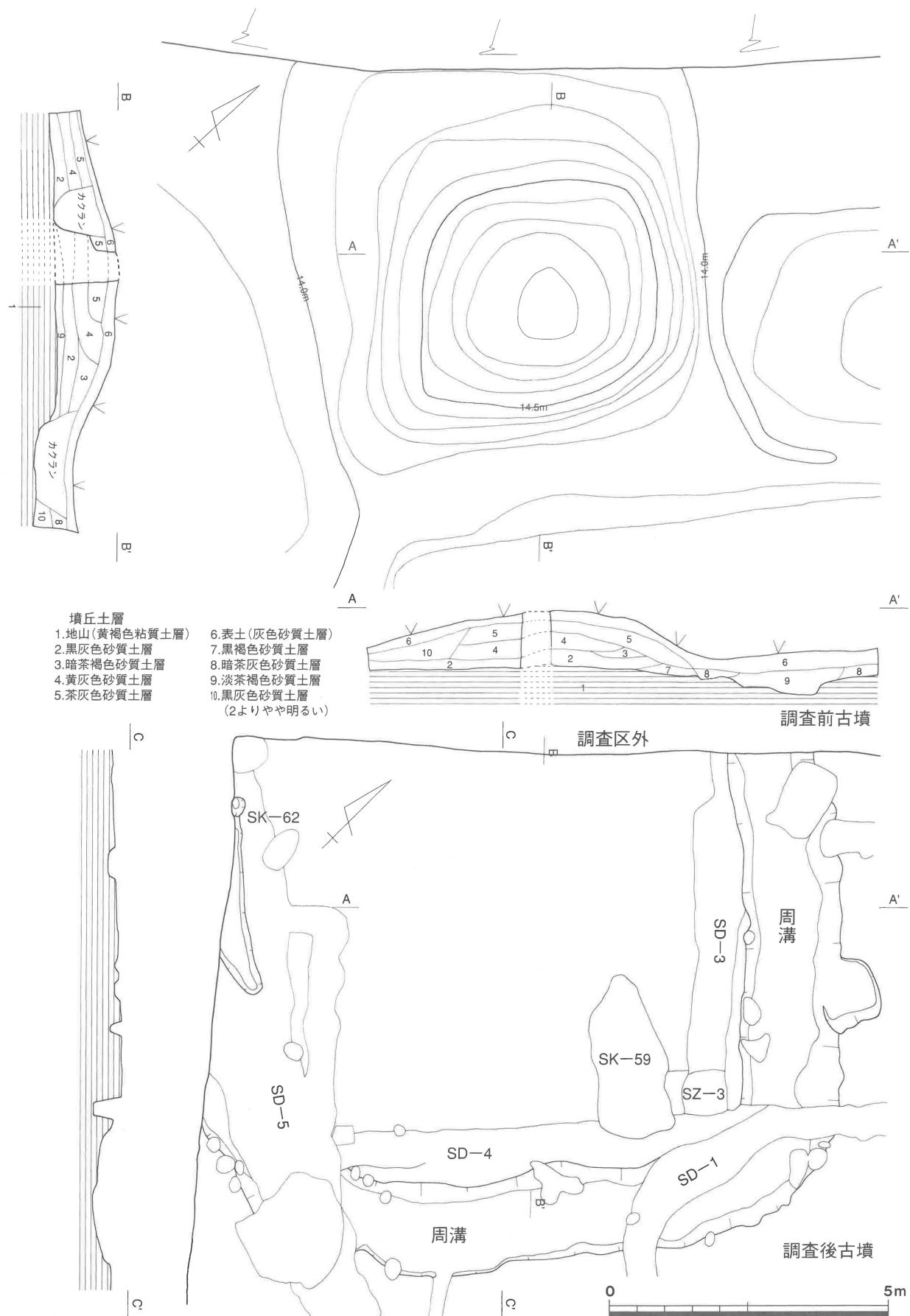
全面的に地山まで掘り下げたところで、周溝が検出されている。周溝は古墳の北東辺、南東辺で確認できた。南西辺の周溝はS D - 5と重複しているため、周溝が残存しているのかは判断が付かなかった。周溝は段丘斜面の調査区外へ延びており、本来は墳丘の三方を隅丸方形形状に囲っていたものと考えられる。検出された北東部の周溝は直線的に延び、断面形は皿状をなす。検出長8.6m以上、幅は1.8m、深さは最大で28cmである。埋土は黒灰色砂質土である。周溝の西側はS D - 3が重複し、南側はS D - 1・S D - 4が重複している。同様に南西部の周溝も直線的に延び、断面形は皿状をなす。検出長は10.5m以上、幅は1.6m～1.7m、深さは最大で35cmである。埋土は黒灰色砂質土で、出土遺物に土師器・高坏（第34図1）があり、周溝の表土からは鉄器（ヤリ）がある。このことから古墳の築造時期は5世紀後半であるものと考えられる。周溝の北側はS D - 1・4が重複し、南側はS D - 5が重複している。南西辺の周溝は、南部で周溝外側の一部が残存していたが、S D - 5と重複しているために本来の形状が何処まで残っているか把握できなかった。S D - 5との重複部分は幅2.0m以上もあり、段丘端へ向かって下がり、更に溝中央が掘り下げられている。掘削深は約15cm、最大で45cmであった。

S D - 5の溝端を本来の周溝の溝端と仮定すると、周溝間の距離は北東～南西間が8.4m、北西～南東間が8.0m以上である。これから古墳の規模は一辺が8.4m程の方墳と推定できる。そして周溝の位置から、古墳の主軸はN - 49° - Wと思われる。

D. 古墳小結

以上、古墳についてまとめよう。墳丘は、後世の溝や土壙によって規模が縮小されており、後世の改変が著しかった。現状では標高の最高点は14.9mであり、一辺が6.5m、高さ1.0mの方墳と考えられた。調査の結果、古墳は幅1.8mの周溝が囲む一辺8.4mの方墳で、主軸はN - 49° - Wと推測された。周溝の出土遺物によって、築造時期は5世紀後半であるものと考えられる。

古墳の築造は、最初に、地山上の黒灰色砂質土層上に黄灰色砂質土層を敷き詰めている。確認はできなかったが、類例からこの層上に木棺を直葬したものと推測できる。その上に茶灰色砂質土層を盛り、更に灰色砂質土層（表土）で覆っている。表土からは須恵器・甕が出土している。甕は供献されたものの可能性がある。また、本来は主体部に埋葬されているはずのヤリが周溝から出土していることから、主体部も土壙等で既に壊されていた可能性も考えられる。



第33図 洗島1号墳調査前測量図・調査後実測図 (1/100)

2. 遺物（第34・35図、第4表）

ここでは古墳墳丘内から出土した縄文時代以外の遺物について説明を行う。古墳内から出土した遺物には、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、陶器、磁器、土師器、瓦などがあり、コンテナ箱（34×54×20cm）に1箱程と少ない。量的には中世～近世の土器が中心である。以下、土器と鉄器に分け、遺構、層位ごとに遺物を説明する。なお、古墳内と重複している後世の遺構やその出土遺物については第4章で説明しているが、周溝内のSK-62出土遺物については古墳に伴う可能性があるので、ここで説明する。遺物についての細かな調整・法量・時期等は第4表の観察表に記している。

A. 土器（第34図）

周溝（第34図1）

1は土師器・高坏である。坏部と脚部は接合できなかったが、同一個体のため合わせて説明する。坏部の口縁部は外傾して真っ直ぐ立ち上がる。端部は丸い。坏体部から坏底部へは屈折し、坏底部は平坦である。調整は内外面板ナデである。脚部は強く屈曲しており、接地面にかけて広がっている。端部は丸い。調整は摩滅のため不明である。古墳時代中期神明式（5世紀後半）と思われる。

SK-62（第34図2・3）

2・3は土師器・高坏の坏部である。2は口縁部が外傾し、真っ直ぐ立ち上がる。端部は丸い。坏体部から坏底部へは屈折し、坏底部は平坦である。調整は摩滅のため不明であるが、板ナデされていた可能性がある。3は口縁部が外傾して、やや内湾気味に上がっている。端部は丸い。坏体部から坏底部へは屈折して稜をなすが、坏底部は膨らみ気味に湾曲している。調整は内面は摩滅のため不明であるが、外面板ナデである。2・3は1と同時期と思われる。

黒灰色砂質土層（第34図4～7）

4は弥生土器・壺の口縁部である。口縁部は受口状をなしており、端部は丸い。調整は摩滅のため不明である。5～7は弥生土器・台付甕である。5は口縁部は内傾し、端部付近で屈曲して外傾する。端部は丸い。調整は摩滅のため不明である。6はハ字状に開く台部である。調整は内面板ナデ、外面は摩滅のため不明である。7は接続部付近の破片で、調整は、内面は摩滅のため不明、外面はハケメである。

墳丘内攪乱部（第34図8～15）

8は土師器・台付甕の台部破片である。ハ字状に開く台部で、端部は肥厚されている。調整は、内面は摩滅のため不明、外面ハケメである。9・10は須恵器・甕の体部破片である。調整は、9は内面はナデ、外面はタタキメ、10は内面同心円文、外面はタタキメである。11は中世陶器・碗である。底

部破片で、高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデ、底部に糸切り痕が認められる。12は陶器・鉢である。口縁部はやや内湾し、端部は内側に張り出して面をなす。調整は内外面回転ナデで、灰釉がかけられている。13は陶器・小瓶の体部破片である。体部は膨らんで頸部にかけて窄まる。調整は内外面回転ナデである。呉須絵がみられる。14は陶器・仏飯器である。口縁部はほぼ直立し、脚部は強く開く。調整は内外面回転ナデであり、呉須絵がみられる。15は軒瓦であり、瓦当面は無文になっている。

墳丘表土（第32図93・第34図16～37）

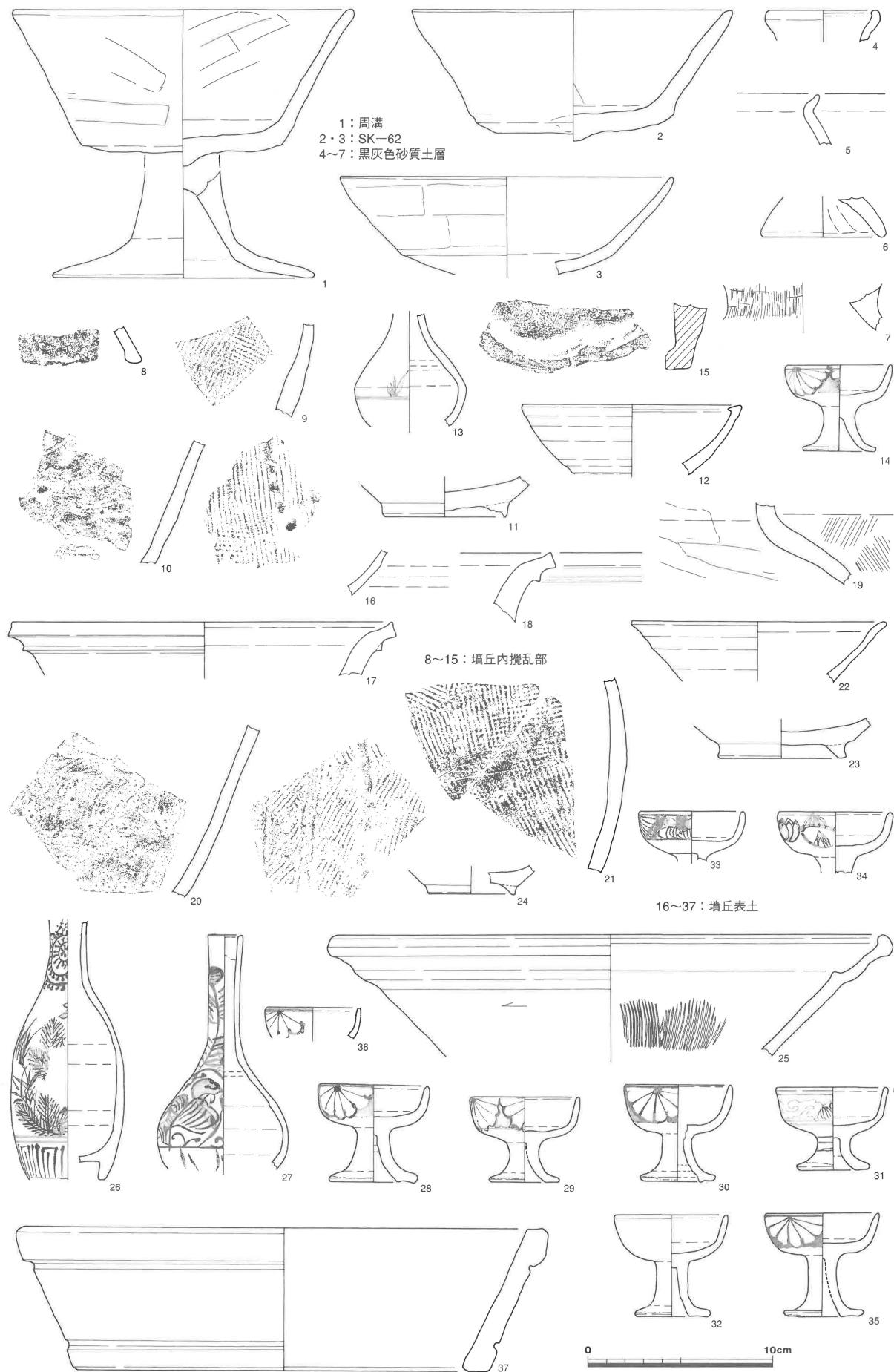
16は須恵器・壺身の体部破片である。調整は内外面回転ナデである。17～21は須恵器・甕である。17・18は口縁部破片で、口縁部は外反し、端部は若干ナデ窪められている。口縁部外面には隆帯が1条巡らされている。調整は内外面回転ナデである。19は頸部の破片であり、調整は内面板ナデ、外面タタキメである。20・21は体部破片であり、調整は外面タタキメ、内面は同心円文（20）、板ナデ（21）である。22は灰釉陶器・碗である。口縁部破片であり、口縁部は直線的に延び、端部付近でやや外反する。調整は内外面回転ナデである。23は中世陶器・碗である。底部破片で、底部には角張った高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデ、底部に糸切り痕が認められる。24は中世陶器・小皿の底部破片である。底部には断面三角形の高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデ、底部に糸切り痕が認められる。25は陶器・擂鉢である。口縁部は直線的に延び、端部付近で屈曲する。端部は肥厚されて丸い。調整は内外面回転ナデで、内面にはクシメがみられる。鉄釉がかけられている。26は陶器・小瓶である。体部は膨らんで底部にかけて若干窄まる。底部には高台が付いている。調整は内外面回転ナデで、呉須絵がみられる。27は磁器・小瓶である。口縁部は直立して体部にかけて膨らむ。調整は内外面回転ナデで、呉須絵がみられる。28～34は陶器・仏飯器で、33・34は脚部を欠く。口縁部はほぼ直立し、脚部は強く開く。調整は内外面回転ナデであり、32以外は呉須絵がみられる。35・36は磁器・仏飯器で、36は脚部を欠く。口縁部はほぼ直立し、脚部は強く開く。調整は内外面回転ナデであり、呉須絵がみられる。37は瓦製の不明品である。口縁部から底部にかけて直線的に外傾し、底は抜けて筒状になる。口縁端部と底部端部付近に2条の沈線文が入れられている。調整は内外面とも回転ナデである。93は錢貨、寛永通寶である。

参考文献

小林久彦 1991 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第12集 牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告書』 豊橋市教育委員会：豊橋

B. 鉄器（第35・36図）

洗島1号墳では、主体部は検出されなかったが、副葬品と考えられる鉄器が若干出土している。いずれも周溝から出土した土師器と同時期の古墳時代中期後葉に属する。



第34図 洗島1号墳出土遺物実測図-1 (1/3)

ヤリ（第35図1）

ヤリの身と柄の接合部付近の破片で、周溝から出土している。茎と柄との接合部の外側に、鉄製の「柄先金具（註1）」が取り付けられている点を特徴とする。

身は平造で、鎬は見あたらない。幅は最大4.1cm、厚さは0.65cmである。関は直角となる。茎は断面方形で、端部に向かうにつれ徐々に細くなり、端部は一文字尻である。X線写真撮影の結果、目釘孔が2カ所に穿たれていることが分かる。

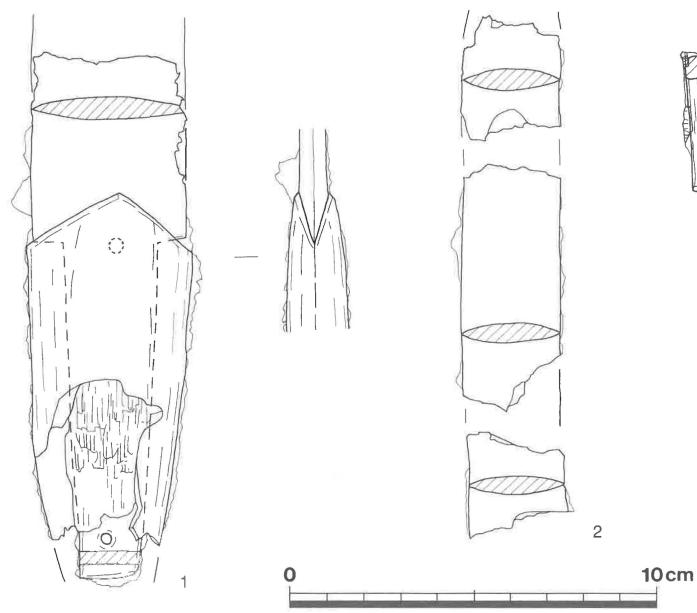
鉄製の柄先金具は頂部が圭角状に尖っており、これが木製であれば呑口式である。実際には2枚の鉄板を茎の前後から貼り合わせたもので、固定は孔に通した目釘によって行われているが、表面からそれを伺うことはできない。関近くの断面形は長楕円形で、貼り合わせた部分が若干鋭角気味になり、杏仁形に近い。柄先金具の下端はすでに欠損しており、ここから茎の先端が露出するが、茎の周囲には木質が明瞭に遺存している。従ってこの金具は、茎を柄に差し込んだ後、その外側から挟み込み、2カ所以上の目釘で固定したものと思われる。なお、金具は下端に向かうにつれ幅を狭めている。

こうした鉄製の柄先金物は類例が少なく、管見によれば京都府宇治二子塚古墳南墳例、千葉県八重原1号墳例、石川県二子塚狐山古墳例、香川県川上古墳例を挙げることができるほか、木製の類似例として奈良県後出3号墳例がある。類例に従えば、欠損している下端は断面が円形を呈するのだろう。実際には身が柄に直接取り付けられているものの、外見上はカバー部分が柄にキャップのように差し込まれているかのような特徴から、「矛」として報告されている例があり、宇治二子山古墳南墳例は「槍身矛」の名称で報告されている（宇治市教育委員会1991）。木装・糸巻き固定のヤリも縁は呑口状を呈することからすれば、ヤリの一類型と見るのが妥当と思われるが、類似例はいずれも中期後葉（TK208～TK23型式期）に属しており、生産時期が限定できる。ちなみに、洗島遺跡出土例以外はいずれも鉢留式短甲と共に伴しており、また前方後円墳または比較的規模の大きな円・方墳であるなど、最上層ではないにしろ、地域の首長墓に位置づけうる古墳である。また二子塚狐山古墳例は槍身が蛇行状に曲がり、特殊な用途が想定される。類例を検討した大谷宏治は、いずれも作りが丁寧であること、保有者は新興の武人的な性格が強い人物であることなど、興味深い指摘を行っている（大谷2004）。いずれにせよ近畿、北陸、四国、関東と列島の広い範囲に分布し、短甲との共伴事例が多いことは、この種のヤリが在地生産によるのではなく、短甲とともに流通した可能性を示唆している。

他の出土古墳に比較して本墳は一辺8.4mの方墳に過ぎず、すでに主体部は失われているが、鉄器の出土量からもともとの副葬量は決して多くはなかったと考えられる。また地域では伝統的な墓制である方墳を採用するなど、他の出土古墳とは様相が大きく異なっている。しかし中期古墳の少ない豊川左岸域では希有な存在であり、地域の「小首長」墓に比定されるべきものであろう。「短甲の出土しない」東三河地域において、その流通の一端をうかがうことができる意義は大きい（註2）。

剣またはヤリ（第35図2）

最大幅2.7cmの鉄器片が数点あり、断面形が両面レンズ状をなすことから、剣またはヤリの一部と考えた。図示したものは3破片で、法量や銹化の状態から同一個体と考えるが、接合はしない。関及び茎を欠損しており、詳細は不明である。法量からすれば、1とは明らかに別個体である。



第35図 洗島1号墳出土遺物実測図—2 (1/2)



第36図 ヤリ類似例集成 (1/10)

鉄鎌 (第35図 3)

鉄鎌の茎部の破片が1点存在する。鎌身部は失われているが、断面は長方形で、恐らく平根鎌だろう。外面に木質が遺存し、一部に口巻の痕跡をとどめている。鉄鎌片はほかにも数点見られる。

註

- 1 長尾町教育委員会1991の中で使用されている名称を採用した。
- 2 集成の掲載図は、下記の参考文献から引用した。なお、類似例の探索とその評価にあたり、鈴木一有氏（浜松市教育委員会）からご教示・ご協力をいただいた。ここに記して感謝します。

参考文献

- 宇治市教育委員会 1991 『宇治二子山古墳発掘調査報告』
- 大谷宏治 2004 「(2) 鉄鎌について」『寺山古墳群』 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所他
- 杉山晋作・田中新史 1989 『古墳時代研究III -千葉県君津市所在八重原1号墳・2号墳の調査-』 古墳時代研究会
- 長尾町教育委員会 1991 『川上・丸井古墳発掘調査報告書』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2003 『後出古墳群』
- 帝室博物館 1937 『帝室博物館学報第9 古墳発掘品調査報告』

第4表 洗島1号墳出土遺物観察表

遺物 NO.	遺構	器種・分類	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整	備考	時期
34—1	周溝	H高坏	18.4 (14.8)	13.8		密	良好	橙褐色	内外面板ナデ、摩滅		神明式
2	S K-62	H高坏	17.4 (7.2)			密	良好	橙褐色	内外面摩滅、外面板ナデ?		神明式
3	S K-62	H高坏	18.1 (5.4)			密	良好	橙褐色	内面摩滅、外面板ナデ		神明式
4	黒灰色砂質土層	Y壺	5.8 (1.7)			密	良好	橙褐色	内外面摩滅		弥生中期
5	黒灰色砂質土層	Y台付甕				密	良好	淡橙褐色	内外面摩滅		弥生中期
6	黒灰色砂質土層	Y台付甕		(2.2)	6.4	密	良好	淡橙褐色	内面板ナデ、外面摩滅		弥生中期
7	黒灰色砂質土層	Y高坏		(2.6)		密	良好	淡橙褐色	内面摩滅、外面ハケメ		弥生中期
8	墳丘内擾乱部	Y台付甕				密	良好	淡褐色	内面摩滅、外面ハケメ		弥生後期
9	墳丘内擾乱部	S甕				密	良好	淡灰褐色	内面ナデ、外面タタキメ		古墳
10	墳丘内擾乱部	S甕				密	良好	淡灰褐色	内面同心円文、外面タタキメ		古墳
11	墳丘内擾乱部	P碗		(2.2)	6.6	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り		古墳
12	墳丘内擾乱部	T鉢	11.8 (3.8)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、灰釉	19c	
13	墳丘内擾乱部	T小瓶	1.7 (6.2)			密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ、灰釉、吳須絵	19c	
14	墳丘内擾乱部	T仏飯器	6.7	4.8	3.8	密	良好	白色	内外面回転ナデ、吳須絵	19c	
15	墳丘内擾乱部	N軒瓦		(3.7)		密	良好	淡灰色	外面ナデ		近世
16	墳丘表土	S坏身				密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ		古墳
17	墳丘表土	S甕	20.8 (2.9)			密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ		古墳
18	墳丘表土	S甕				密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ		古墳
19	墳丘表土	S甕				密	良好	淡灰色	内面板ナデ、外面タタキメ		古墳
20	墳丘表土	S甕				密	良好	淡灰褐色	内面同心円文、外面タタキメ		古墳
21	墳丘表土	S甕				密	良好	淡灰褐色	内面板ナデ、外面タタキメ		古墳
22	墳丘表土	K碗	13.6 (3.3)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	10c	
23	墳丘表土	P碗		(2.2)	6.6	密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ、底部糸切り	12c後	
24	墳丘表土	P小皿		(1.3)	4.6	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	12c後	
25	墳丘表土	T播鉢	39.6 (8.9)			密	良好	淡灰褐色	外側面回転ナデ、内面グシメ、鐵輪	19c前	
26	墳丘表土	T小瓶	2.0 (14.3)	4.0		密	良好	淡白灰色	内外面回転ナデ、吳須絵	19c	
27	墳丘表土	Z小瓶	3.8 (12.9)			密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、吳須絵	19c	
28	墳丘表土	T仏飯器	5.9	5.4	4.6	密	良好	白色	内外面回転ナデ、灰釉、吳須絵	19c	
29	墳丘表土	T仏飯器	5.8	4.7	3.6	密	良好	白色	内外面回転ナデ、灰釉、吳須絵	19c	
30	墳丘表土	T仏飯器	5.8	5.3	3.8	密	良好	白色	内外面回転ナデ、灰釉、吳須絵	18c	
31	墳丘表土	T仏飯器	5.9	4.6	3.6	密	良好	淡白褐色	内外面回転ナデ、灰釉、吳須絵	19c	
32	墳丘表土	T仏飯器	6.0	5.6	3.8	密	良好	淡白褐色	内外面回転ナデ、灰釉	18c	
33	墳丘表土	T仏飯器	5.8 (2.8)			密	良好	白色	内外面回転ナデ、灰釉、吳須絵	19c	
34	墳丘表土	T仏飯器	6.2 (3.3)			密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、灰釉、吳須絵	19c	
35	墳丘表土	Z仏飯器	6.1	5.7	4.0	密	良好	白色	内外面回転ナデ、吳須絵	19c	
36	墳丘表土	Z仏飯器	5.0	(1.7)		密	良好	白色	内外面回転ナデ、吳須絵	19c	
37	墳丘表土	N不明	28.4 (7.9)	22.2		密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ、スス付着		近世
32—93	墳丘表土	I銭貨	寛永通寶、文字種: 真書、国名: 日本								近世
35—1	周溝	Iヤリ	長さ14.2、幅4.1、厚さ0.6					木質部残存			古墳中期
2	試掘跡	I劍orヤリ	長さ13以上、幅2.7、厚さ0.6					破片3点			古墳中期
3	試掘跡	I鉄鏃	長さ4.0、幅0.9、厚さ0.6					茎部、木質部残存			古墳中期

* Y-弥生土器 S-須恵器 K-灰釉陶器 P-灰釉系陶器 T-陶器 Z-磁器 H-土師器 R-石製品

I-鐵製品 法量の単位はcm、()は残存数値。底径には、脚部径や台部径を含む。

第6章 自然遺物

1. 資料の採取状況

今回分析した自然遺物は現地で土壌や表土などから採集したものである。採集された自然遺物には動物遺体と植物遺体が確認されている。動物遺体は量的に極めて少ないが、古墳から出土している。大半は貝類であったが、貝類以外に獸骨が2点、鳥骨が2点が確認された。獸骨は古墳表土からイヌの下顎骨1点と左大腿骨が1点、鳥骨はK-10区の攪乱土壌から細片2点が出土している。ただし、これらは現代のものの可能性が高いため、今回の報告では割愛している。植物遺体は表土などから現代のものと思われるウメの種子が4点、E-6区SZ-2の火葬墓から種不明の種子が1点確認されたが、今回は分析していない。以下では、動物遺体のうち貝類について分析を行う。

2. 貝類 (第5・6表)

貝類は腹足綱4種、二枚貝綱5種で、合計9種（第5表）である。その集計に際しては、腹足綱の場合は殻頂または殻口を含む部分が半分以上残存しているものを1個体とし、二枚貝綱の場合は殻頂の残存しているものを1個体として左右に分けて集計した。貝類出土地及び種類は第6表に示している。今回確認された貝類はハマグリが多く、マガキ、ダンベイキサゴの海生種やマイマイなどの陸生種が僅かにみられた。現海岸線から9kmも内陸に入った洗島遺跡から海生種が出土している点は興味深い。

ダンベイキサゴ *Umbonium (Suchium) giganteum* (LESSON)

太平洋岸の水深1.5m以内に生息する貝類である。中世以降に嗜好されていたようで、豊橋市内の中世～近世の集落遺跡から少量ではあるが出土する例が確認されている。当遺跡からは3個体が表土中から出土している。時期は中世以降のものと思われる。

ウスカワマイマイ *Fruticicola (Acusta) despecta sieboldiana* (PFEIFFER)

本州以南の水田に群生する種であり、当遺跡からは1個体が出土している。表土からの出土であり、現生のものの可能性がある。

オナジマイマイ科 *Bradybaenidae* gen.et sp.indet.

2個体のみであるがオナジマイマイ科のものと思われる、いわゆるカタツムリが表土中から出土している。食用として採られたというよりは、当地に生息していたものと思われる。

キセルガイ科 *Clausiliidae* gen.et sp.indet.

キセルガイ科のものは石灰岩地や楠木の幹に生息するものが多く、当遺跡では古墳表土から1個体が出土している。やはり、当地に生息していたものと思われる。

タマキガイ *Glycmeris vestita* (DUNKER)

三河湾の水深1.5m～3mに生息する、今ではあまり採れない貝類である。縄文時代には貝輪の素材

として好んで用いられていた。当遺跡からは、縄文時代中期前葉のF-6区SK-18から左殻が1個体出土している。殻長6.7cmのほぼ完形品であり、食用ではなく、おそらく貝輪の素材として遺跡に持ち込まれたものと考えられる。

マガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG)

全国の内湾の潮間帯の岩礁砂泥底に生息し、密集してカキ礁を形成する場合がある。現在の三河湾東部湾奥でも普遍的にみられる。当遺跡では表土から左殻1個体が出土している。時期は不明である。

ヤマトシジミ *Corbicula (Corbiculina) leana* PRIME

全国の河川や渕、湖などの汽水域の砂泥底に生息し、豊川流域では現在でも採集できる。当遺跡では時期不明の左殻2個体が表土より出土している。

アサリ *Ruditapes philippinarum* (ADAMS & REEVE)

全国の内湾で潮間帯～水深10mまでの砂礫底や砂泥底に生息する。三河湾東部湾奥の主要貝種である。近世以降に干潟の主体貝種になり、現在でも多量に採集できる。当遺跡では表土から右殻が2個体、古墳表土から左殻が1個体出土している。これらは近世以後のものと推測される。

ハマグリ *Meretrix lusoria* [RÖDING]

北海道南部以南の内湾で潮間帯～水深20mまでの砂泥底に生息する。三河湾東部湾奥では死滅に近い状態であるが、明治以前では干潟の優勢種であった。当遺跡では古墳の整地層である黄灰色砂質土層から左殻が2個体、右殻が1個体出土している。これらは古墳築造時に混入していることから、古墳時代中期のものと思われる。古墳の攪乱部や試掘トレンチからもハマグリの殻が出土している。

第5表 動物遺体種名一覧表

I. 軟体動物門 MOLLUSCA

腹足綱 GASTROPODA

1. ニシキウズ科ダンベイキサゴ
2. オナジマイマイ科ウスカワマイマイ
3. オナジマイマイ科、属、種不明
4. キセルガイ科、属、種不明

Umbonium (Suchium) giganteum (LESSON)
Fruticicola (Acusta) despecta sieboldiana (PFEIFFER)
Bradybaenidae gen. et sp. indet.
Clausiliidae gen. et sp. indet.

二枚貝綱 BIVALVIA

1. オオシラスナガイ科タマキガイ
2. ジジミガイ科ヤマトシジミ
3. イタボガキ科マガキ
4. マルスダレガイ科アサリ
5. マルスダレガイ科ハマグリ

Glycmeris vestita (DUNKER)
Corbicula (s.s.) *japonica* (PRIME)
Crassostrea gigas (THUNBERG)
Ruditapes philippinarum (ADAMS & REEVE)
Meretrix lusoria [RÖDING]

第6表 動物遺体出土地一覧表

地区	遺構	層位等	時 期	出土動物遺体
F - 6	SK-18		縄文中期前葉	タマキガイ左殻1
D - 5	洗島1号墳	黄灰色砂質土層	古墳時代中期	ハマグリ左殻2／右殻1
D - 5	洗島1号墳	茶褐色砂質土層	中世以降	ハマグリ右殻1
D - 5	洗島1号墳	試掘トレンチ内	不明	ハマグリ左殻2／右殻3
D - 5	洗島1号墳	古墳表土	不明	キセルガイ科1、アサリ左殻1
		表土	不明	ダンベイキサゴ3、ウスカワマイマイ1、オナジマイマイ科2、マガキ左殻1、アサリ右殻2、ヤマトシジミ左殻2

第7章 人骨

1. 豊橋市洗島遺跡から出土した焼人骨

長岡朋人（聖マリアンナ医科大学解剖学教室）

平成17年、豊橋市教育委員会による発掘調査によって、豊橋市牛川町洗島に所在する洗島遺跡から焼人骨が検出された。時代は縄文時代と中世である。以下に人類学的な鑑定結果を報告する。焼骨の鑑定はUbelaker（1989）に従った。

縄文人骨（SK-2）

出土人骨は焼骨であり、いずれも変形や断片化が著しい。出土人骨の総重量は9.0gである（第7表）。出土部位は脛骨の他、四肢長骨片や骨細片であり、性別や年齢の推定はきわめて困難である（第7表）。重複する部位がないため、1個体と推定できる。程度は大きくないが、骨の変形、歪み、亀裂の変形、歪みがあり、骨が軟部組織に包まれた状態で火葬されたことが示唆される。また、焼人骨は白色から灰白色の色調を呈しており、高温で焼かれたものと推察される。

中世人骨（SZ-1）

出土人骨は焼骨であり、いずれも変形や断片化が著しい。出土人骨の総重量は49.2gである（第7表）。出土部位は頭蓋、下顎骨、脛骨の他、四肢長骨片や骨細片である（第7表）。性別や年齢の推定は困難であるが、未成年に相当する骨は含まれていない。重複する部位がないため、1個体と推定できる。骨には変形や亀裂があるため、この個体は骨が軟部組織に包まれていた状態で焼かれたことが示唆される。また、焼人骨は白色から灰白色の色調を呈しており、高温で焼かれたものと推察される。

中世人骨（SZ-2）

出土人骨は焼骨であり、いずれも変形や断片化が著しい。出土人骨の総重量は4.6gである（第7表）。出土部位は下顎骨の他、四肢長骨片や骨細片である（第7表）。性別や年齢は不明である。重複する部位がないため、1個体と推定できる。焼人骨は白色から灰白色の色調を呈しており、高温で焼かれたものと推察される。

中世人骨（SZ-3）

出土人骨は焼骨であり、いずれも変形や断片化が著しい。出土人骨の総重量は19.5gである（第7表）。出土部位は大腿骨の他、四肢長骨片である（第7表）。性別や年齢は不明である。重複する部位がないため、1個体と推定できる。骨の変形、亀裂が著しく、遺体が軟部組織に包まれている状態で焼かれたことが示唆される。また、焼人骨は白色から灰白色の色調を呈しており、高温で焼かれたものと

推察される。

中世人骨（SD-1）

蔵骨器とともに出土した人骨である。出土人骨は焼骨であり、いずれも変形や断片化が著しい。出土人骨の総重量は252.6gである（第7表）。出土部位は頭蓋、頸椎、骨盤、上腕骨、基節骨（手）、大腿骨、脛骨、腓骨、膝蓋骨、舟状骨（足）の他に、四肢長骨片や部位不明の骨片である（第7表）。性別や年齢の推定は難しいが、未成年に相当する骨は含まれていない。重複する部位がないため、1個体と推定できる。骨の変形、亀裂が著しく、収縮や捻転が顕著に認められる。これは遺体が軟部組織に包まれた状態で焼かれたことを示唆する。焼人骨は黒色から灰白色の色調を呈しており、焼成温度にはらつきがあったことが推察される。

骨病変・特殊所見

焼骨から観察しうる限り、骨病変や特殊所見は認められなかった。

まとめ

1. 同定ができた骨はいずれも人骨であり、動物骨は含んでいない。
2. 各遺構から出土した人骨には重複する部位がないため、遺構ごとの最小個体数は1個体である。
3. 出土人骨はいずれも焼骨であり、熱による歪みや変形が著しいため、軟組織が着いたまま火葬された可能性が高い。
4. 出土人骨の性別と年齢は不明である。
5. 骨病変や特殊所見は認められなかった。

文献

Ubelaker D. H. (1989) Human skeletal remains. Excavation, analysis, interpretation. Aldine, Chicago.

謝辞

本人骨の鑑定の機会を与えてくださった豊橋市教育委員会岩瀬彰利氏と関係者各位に謝意を申し上げます。

第7表 出土焼人骨

時代	遺構	種	部位		点数	重量 (g)
縄文中期	SK-2	ヒト	脛骨	左右不明	3	6.4
縄文中期	SK-2	ヒト?	四肢長骨片		3	1.5
縄文中期	SK-2	ヒト?	骨片		細片多數	1.1
					計	9
中世	SZ-1	ヒト	頭蓋	頭蓋冠など	9	4.1
中世	SZ-1	ヒト	下顎骨	オトガイ、左筋突起	2	2.8
中世	SZ-1	ヒト	脛骨	左右不明	1	1.6
中世	SZ-1	ヒト?	四肢長骨片		細片多數	19.4
中世	SZ-1	ヒト?	骨片		細片多數	21.3
					計	49.2
中世	SZ-2	ヒト	下顎骨	下顎体	1	3.1
中世	SZ-2	ヒト?	四肢長骨片		1	1.2
中世	SZ-2	ヒト?	骨片		5	0.3
					計	4.6
中世	SZ-3	ヒト	大腿骨	左右不明	2	5.1
中世	SZ-3	ヒト?	四肢長骨片		細片多數	14.4
					計	19.5
中世	SD-1	ヒト	頭蓋	頭蓋冠	19	29.6
中世	SD-1	ヒト	頭蓋	蝶形骨	3	3.8
中世	SD-1	ヒト	頭蓋	左側頭骨錐体	1	1.7
中世	SD-1	ヒト	椎骨	頸椎	1	0.7
中世	SD-1	ヒト	骨盤?	左右不明	1	1.5
中世	SD-1	ヒト	上腕骨	左右不明	2	5.8
中世	SD-1	ヒト	基節骨(手)	左右不明	1	1
中世	SD-1	ヒト	膝蓋骨	右側	1	7.9
中世	SD-1	ヒト	大腿骨	遠位端、左右不明	1	4.7
中世	SD-1	ヒト	大腿骨	左右不明	7	29.8
中世	SD-1	ヒト	脛骨	右側	1	7
中世	SD-1	ヒト	脛骨	左右不明	5	20.1
中世	SD-1	ヒト	腓骨	左右不明	2	5.4
中世	SD-1	ヒト	舟状骨(足)	左右不明	1	1.4
中世	SD-1	ヒト	中足骨	左右不明	1	1.2
中世	SD-1	ヒト?	四肢長骨片		細片多數	107.7
中世	SD-1	ヒト?	骨片		細片多數	23.3
					計	252.6

第8章 考察

1. 洗島遺跡検出の竪穴住居について

洗島遺跡では様々なタイプの竪穴住居が6軒検出されている。これら住居からの土器出土量は極めて少なく、また出土しても前期中葉～中期前葉のものが混ざっている状態であった。最も新しい土器を住居の帰属時期とすると、土器が出土している住居は全て中期前葉になってしまう。土器だけでは住居の時期が決定できないことがわかった。このため、愛知県内の住居例を参考にして、出土土器と住居形態の双方から時期を推測するものとする。

まず、愛知県における竪穴住居の変遷（岩瀬1997）をみよう。前期の住居は、豊田市大安寺遺跡・馬場遺跡・宮ノ前遺跡、設楽町鞍舟遺跡、名古屋市大曲輪貝塚から発見されている。形態のわかるものをみると、前葉（清水ノ上Ⅰ式頃）の住居には大安寺遺跡例があり、平面形は楕円形で、中央に主柱穴が1本、周囲に6本の柱穴が巡っている。中葉のものは鞍舟遺跡、馬場遺跡がある。鞍舟遺跡は北白川下層式期の住居が6軒あり、平面形は隅丸方形が2軒、円形が4軒確認されている。このうち3号住居は隅丸方形で、8本の柱穴が環状に巡っている。馬場遺跡は北白川下層Ⅱ式の住居が2軒あり、平面形が円形で10本の柱穴が環状に巡るものと、平面形が円形で6本の柱穴が環状に巡り、壁面に垂木跡が巡っているものがある。大曲輪貝塚からは、詳細な時期は不明だが2軒の隅丸方形の住居が検出されている。後葉の住居は発見されていない。

次に中期であるが、前葉の住居は設楽町大根平遺跡、刈谷市芋川遺跡で発見されている。大根平遺跡例（五領ヶ台式併行）があり、平面形は楕円形で5本の柱穴が五角形に並んでいる。芋川遺跡では船元Ⅰ式に比定されている竪穴住居が2軒ある（矢田ほか1995）。出土土器を検討してみると、J7号住居は中期前葉の北裏C式、J3号住居は中期中葉の山田平式以降と扱った方がよさそうである。竪穴住居は、北裏C式のJ7号住居は平面形が楕円形で5本の柱穴が五角形配置されており、山田平式以降のJ3号住居は平面形が楕円形で6本以上の柱穴が環状に巡り、壁面に垂木跡がある。中葉の住居は新城市東平遺跡（北屋敷式か咲畠式）があり、平面形は五角形で5本の柱穴が五角形に並んでいる。後葉の住居は多数が発見されている。住居形態は多様化して平面形は円形、隅丸方形、五角形があり、柱穴も方形配置や環状配置のものがみられる。

以上、愛知県における住居形態をまとめると、前期前葉は平面形が楕円形で中心に1本の柱穴を置く環状配置、中葉は円形と方形の双方があり、柱穴は環状配置である。後葉は不明である。中期は前葉は楕円形で、柱穴は環状または五角形配置であり、中葉は量が少なくて不明瞭であるが、五角形で柱穴が五角形配置が確認されている。愛知県では当該期の資料数は少ないものの、以上のような変遷をとるものと推測される。

さて、平面形と柱穴配置から洗島遺跡の竪穴住居をみよう。まず平面形が五角形のものについて考える。五角形のものは中期中葉から後葉にかけて出現する形態である。上限は中期中葉の北屋敷式頃までは確認されている。中期以降で考えるとSB-1は中期中葉の山田平式、SB-6は中期前葉の

五領ヶ台式？と考えるのが妥当と思われる。次に隅丸長方形であるが、このような縦長で6主柱穴のものは東海地方からは発見されていない。しかし周辺地域を見渡すと、埼玉県など北関東地方の前期中葉～後葉の遺跡では隅丸長方形で6主柱穴の竪穴住居が確認されており、中部高地から関東地方では多くみられる住居形態であることがわかる（石野1990）。SB-4からは東日本系の前期後葉十三菩提式が出土しており、併行する西日本系の大歳山式も出土している。このことから、SB-4は前期後葉の東日本系（十三菩提式系）住居と考える。隅丸方形の住居は、東海地方では前期中葉と中期後葉に多い住居形態である。SB-3から出土している土器は量は少ないものの、中部高地から関東地方の前期後葉十三菩提式と中期前葉新道式であり、在地の土器が全く出土していない。このことから住居形態も東日本を視野に入れて考える必要が生じる。中部高地から関東地方では前期後葉～中期前葉では隅丸方形の住居が多い。両地方を考慮すると、SB-3は前期後葉～中期前葉の東日本系住居の可能性がある。最後に円形の住居であるが、円形の住居は、東海地方では前期前葉～中期後葉まで続くと考えられる住居形態である。洗島遺跡ではSB-2・5の2軒が確認されている。このうちSB-5は土器が出土していないため、遺跡存続期間の前期前葉～中期中葉の時期としかわからない。一方のSB-2はSB-3と重複しており、両者の区別ができていないため遺物が混在している。SB-2出土土器型式からSB-3出土土器型式の十三菩提式、新道式を引くと、前期前葉の清水ノ上Ⅱ式と前期中葉の土器（おそらく北白川下層Ⅱ式系）が残る。住居形態が東海地方で普遍的である点と出土土器から、SB-2は前期前葉～中葉のものと推測される。

今まで述べたように、出土土器と住居形態から推測した住居時期をまとめると、第8表になる。これをみてわかるように、調査区内での住居は時期が重複するものは殆ど無く、基本的には1軒、重なっても2軒であったようである。

参考文献

- 石野博信 1990 『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館：東京
 岩瀬彰利 1997 「三河湾・伊勢湾周辺地域における縄文時代住居の変遷について（1）－三河・尾張編－」『三河考古』第10号 1～21頁 三河考古学談話会：豊橋
 矢田直幸・久永春男・斎藤嘉彦ほか 1995 『芋川遺跡』刈谷市教育委員会：刈谷

第8表 竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模(m)	確認柱穴数	柱穴配置	その他	出土土器	推定時期
SB-1	五角形	4.0×3.5	4本？	五角形配置？		大歳山式、十三菩提式、山田平式等	中期中葉
SB-2	円形	径4.0	10本	環状配置	垂木跡？	清水ノ上Ⅱ式、十三菩提式、新道式等	前期前葉～中葉
SB-3	隅丸方形	5.0×4.8	4本？	五角形配置？		十三菩提式、新道式	前期後葉～中期前葉
SB-4	隅丸長方形	6.4×3.2	6本	五角形配置		北白川下層Ⅱc式、大歳山式、十三菩提式、山田平式	前期後葉
SB-5	円形	径4.5	9本	環状配置	垂木跡？	なし	前期前葉～中期中葉
SB-6	五角形	3.6×2.9	4本	五角形配置		五領ヶ台式？、船元式	中期前葉

2. 洗島遺跡の性格について

洗島遺跡の発掘調査によって、縄文時代、古墳時代、中世～近世を中心とした遺跡であることがわかった。ここでは今回の調査成果を時代ごとにまとめ、洗島遺跡の性格を考えよう。

縄文時代の遺構、遺物は前期前葉中越式～中期中葉の山田平式までのものが断続的に出土している。中期前葉の北裏C式～中葉の山田平式までの遺物が多く、この時期が主体である。遺構では、様々な形態の竪穴住居が6軒検出されたのは大きな成果であった。竪穴住居の埋土は地山と殆ど変わらず、検出には苦労した。こうした埋土であると縄文遺跡で遺物のみが発掘される例などは、住居の検出漏れも存在しているものと思われるものである。検出された住居は土器が混在しているため時期は断定できなかった。しかし形態から時期を推測することができた。今回、平面形が五角形の住居が2軒(SB-1・6)検出できたが、SB-1は中期中葉の山田平式、SB-6は中期前葉の五領ヶ台式に相当するものと思われた。今まで愛知県において五角形住居の最古例は新城市東平遺跡SB(V-2)01(中期中葉北屋敷式頃)であり、五角形住居が中期前葉まで遡る可能性が考えられた。また、中部高地から関東地方に多い長方形で6柱穴の住居(SB-4:前期後葉十三菩提式)が検出されたのは興味深い。この形態の住居は今まで東海地方では発見されておらず、初検出となる。愛知県では前期後葉の住居は発見されておらず、その住居形態については不明な点が多い。SB-4では東日本系の十三菩提式が出ていることから、この長方形6柱穴の形態がこの地域の普遍的な形態なのか、それとも直接中部高地から関東地方から来た人が住んだのかは、類例を待つ必要があろう。

SK-2は突出部のある円形土壙で、中央部の窪みから砥石が直立した状態で出土している。土壙内からは少量の焼人骨が散在して出土していることから土壙墓であり、しかも砥石が直立した状態で出土していることから、何らかの祭祀が行われていた可能性が考えられた。今回の報告ではSK-2から中期中葉の山田平式土器が出土したことから、縄文時代中期中葉の土壙墓の可能性を考えた。縄文時代の焼人骨や祭祀と考えられる砥石が直立した状態で出土したのなら非常に珍しい。しかし、現在までの情報ではこれを積極的に評価できない。失敗であったのが、焼人骨の年代測定をすることができなかつたことである。周辺には中世以降の火葬墓が見つかっており、何らかの要因で中世の焼人骨がSK-2に混ざり込む可能性はあるからである。焼人骨の年代が縄文時代であると確定できた段階で、初めてSK-2が評価されよう。

出土した縄文土器についてみよう。今回初めて中部高地の中越式土器が検出された。また、前期後葉の土器もある程度出土しており、西日本系の大歳山式と東日本系の十三菩提式が半々を占めているという印象を受けた。大歳山式が思ったより少なかった。両地方の接点である東三河地域であるため、このような割合になったのであろう。縄文土器の主体となる中期前葉の北裏C式、中葉の山田平式は東三河地域では今まで様相がよく判っていなかった時期である。今回、SK-1から山田平式と五領ヶ台式の折衷土器(第14図47)が出土している。今まで東海地方において五領ヶ台式に併行する土器型式は北裏C式とされ、後続型式の山田平式は新道式～藤内式に併行するものと考えられていた。しかし、五領ヶ台式と折衷する山田平式が出土したことで、山田平式が中期前葉の五領ヶ台式まで遡る

ことがわかった。この折衷土器は、山田平式の併行関係を考える上で重要である。

黒曜石は約30点が出土している。遺構に伴う時期がわかるものはほとんどないため前期～中期中葉のものとしかわからないが、遺跡の主体からみて大半は中期のものと思われる。黒曜石の分析では諏訪（星ヶ台）産のものが81.8%を占め、神津島（恩馳島）産のものが18.2%を占めていた。中部高地が中心であるが、伊豆からも黒曜石が運ばれていたのである。洗島遺跡からは貝輪の材料となるタマキガイも出土しており、交易品が流入している実態が明らかとなった。

縄文時代の洗島遺跡をまとめると、数軒構成の小規模集落であることがわかった。出土土器からみると中部高地とのつながりが強く感じられ、実際に中部高地産の黒曜石も運ばれてきている。また河口の三河湾で採れるタマキガイも出土している。洗島遺跡は大河川である豊川に近い段丘上という好立地にあり、その上流の中部高地や下流の三河湾と舟を使って川を利用した交易が想定できるのである。そして黒曜石など中部高地との交易が盛んであったことから、十三菩提式の頃には中部高地方面から直接来た人が長方形6柱穴の住居を建てて当地に住んでいた可能性も考えられよう。

次の古墳時代では方墳があるが、古墳以外の遺構は土壙が若干検出されているのみである。洗島1号墳の墳丘は、後世の溝や土壙によって規模が縮小されていた。本来は幅1.8mの周溝が囲む一辺8.4mの方墳で、主軸はN-49°-Wと推測された。周溝の出土遺物によって、築造時期は5世紀後半であることがわかっている。築造方法は地山上の黒灰色砂質土層上に黄灰色砂質土層を敷き詰め、主体部を形成していたようであるが、確認はできなかった。その上に茶灰色砂質土層を盛って墳丘を完成させている。主体部は壊されていたようで確認できなかったが、周溝から出土した副葬品のヤリ（柄先金具）は、出土する類例が少なくて貴重である。このような希少品が副葬されていることから、洗島1号墳はこの地域の小首長の墓であったものと考えられる。

主体となる時期は中世から近世である。屋敷の区画溝と掘立柱建物が18棟、柵が2列確認されている。掘立柱建物は古墳以南で散在していた。時期のわかるものはSB-8の比較的大型な総柱建物のみであるが、大半の掘立柱建物は近世のものと思われる。建物は復元できなかつたが、土壙が多数検出されていることから、もっと数多くの掘立柱建物が存在していたものと考えられる。集落を二分するようにSD-7・8の溝が横断している。屋敷地の区割りがなされていたが、近世のSD-1などは一辺が12m程度の小規模な区割りである。古墳周辺には中世～近世の火葬墓が集中しており、墓域を形成している。火葬墓は3基が確認できたが、SD-1から蔵骨器なども出土していることからもっと多数の火葬墓があったものと考えられる。火葬墓のうちSZ-1は残りが非常に良かった。炭素14年代の暦年較正でSZ-1は15世紀後半～17世紀中頃、SZ-2は16世紀中頃～17世紀中頃という年代値を得ている。分析によって薪はSZ-1はクスノキ、SZ-2はシイノキ属・タケ亜科が使われたことがわかっている。土師器皿や渡来鏡という年代が押さえにくい遺物しか出土しない火葬墓において、実年代を得ることができた点は貴重といえよう。また、古墳は溝や土壙で規模が縮小されていたが、供献用の仏飯器が多数出土しており、近世では信仰の対象となっていた可能性もある。

以上まとめると、洗島遺跡は縄文時代は小規模集落、古墳時代は古墳が築かれ、中世から近世にかけては段丘端部は墓域、その内側は集落が営まれていた遺跡と結論付けられる。

付 載

1. 洗島遺跡出土黒曜石製石器の原産地推定

池谷信之（沼津市文化財センター）

A. はじめに

豊橋市教育委員会岩瀬彰利氏の依頼を受けて、洗島遺跡出土黒曜石の蛍光X線分析法による原産地推定を実施した。分析対象としたのは洗島遺跡から出土した分析可能なサイズの黒曜石全点（26点）である。岩瀬氏の所見によれば、SK-21から出土した分析No.14・No.15は前期後葉に属する可能性があるが、その他の資料は山田平式を中心とする中期前葉に属するものと考えてよいとのことである。

B. 分析方法

分析には筆者が所有するエネルギー分散型蛍光X線分析装置SEA2110を使用した。測定条件を以下に記す。

電圧：50kV 電流：自動設定 照射径：10mm 測定時間：300sec 霧囲気：真空

測定の結果得られた元素の強度を用いて、判別図法（図による産地推定）と判別分析（多変量解析による産地推定）を行い、その結果を総合して産地を決定している。今回は紙数の制約からその記述を省略するが、詳細については望月明彦や筆者の概説を参照されたい（望月1998・池谷2005）。ここでは判別図（第37図）の指標のみを示しておく。

指標1 Rb分率=Rb強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）

指標2 Mn強度×100/Fe強度

指標3 Sr分率=Sr強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）

指標4 log（Fe強度/K強度）

C. 分析結果

判別図を第37図に、分析結果の集計表を第9表に掲げた。測定された1点ごとの強度を第10表に、それに基づく判別分析結果を第11表に示した。また提供を受けた黒曜石製石器は26点であったが、風化のためか光沢を失っているものが多く、4点が測定不可となった。前期前葉に属する可能性のあるNo.14・No.15の推定結果は、それぞれ諏訪星ヶ台（SWHD）と神津島恩馳（KZOB）であったので、確実な中期前葉の組成は、第9表のSWHDとKZOBからそれぞれ1点ずつを引いた数となる。

D. 分析結果についての検討

中期前葉に限った分析結果は、諏訪星ヶ台（SWHD）17点（85.0%）・神津島恩馳（KZOB）3点（15%）となる。東海西部において縄文時代の黒曜石製石器の原産地分析を定量的に行った例はあまり多くないが、これまでの断片的な分析結果の多くは諏訪星ヶ台（SWHD）産黒曜石が卓越する結果を

示している。本遺跡においてもこうした傾向に協調的な結果が得られている。しかし少数ながら神津島恩馳（KZOB）が含まれている点は、どのように理解すればよいのだろうか。

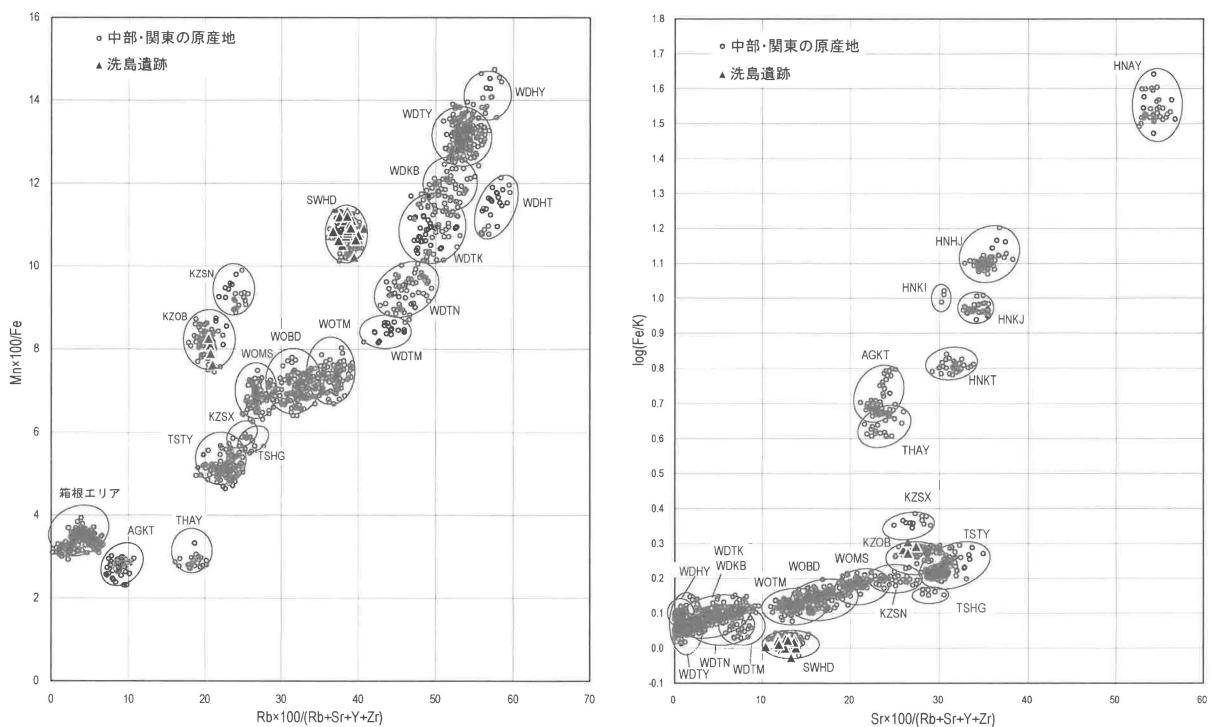
洗島遺跡が形成された縄文時代中期初頭～前葉は、「神津島黒曜石の陸揚げ地」と考えられている静岡県河津町見高段間遺跡の成立に象徴されるように、神津島黒曜石の流通量・流通範囲が拡大している。かつて東村武信・藁科哲男が分析を行った静岡県浜北市梶池遺跡（中期初頭）では、10点中8点が「神津島」という結果を示し（松崎町教育委員会1983『伊豆・平野山遺跡』p.188）、さらに滋賀県米原市筑摩田遺跡（中期初頭～前葉）でも神津島黒曜石の分析例が報告されている。

本遺跡における神津島恩馳産黒曜石の存在もこうした神津島黒曜石の西への分布範囲の拡大という動向の中に位置づけることができよう。

判別図の範囲から外れるため「不可」としたNo.08・No.09・No.26も判別分析は神津島恩馳（KZOB）という結果を示しており、実際には原産地組成18.2%をかなり上回る割合で存在した可能性が高い。

第9表 洗島遺跡黒曜石産地推定集計表

エリア	判別群	記号	試料数	%
和田(WD)	フヨーライト	WDHY	0	0.0
	鷹山	WDTY	0	0.0
	小深沢	WDKB	0	0.0
	土屋橋北	WDTK	0	0.0
	土屋橋西	WDTN	0	0.0
	土屋橋南	WDTM	0	0.0
	古峰	WDHT	0	0.0
和田(WO)	高松沢	WOTM	0	0.0
	ブドウ沢	WOBD	0	0.0
	牧ヶ沢	WOMS	0	0.0
諏訪	星ヶ台	SWHD	18	81.8
蓼科	冷山	TSTY	0	0.0
	双子山	TSHG	0	0.0
天城	柏峰	AGKT	0	0.0
箱根	烟宿	HNHJ	0	0.0
	鍛冶屋	HNKJ	0	0.0
	黒岩橋	HNKI	0	0.0
	上多賀	HNKT	0	0.0
	芦ノ湯	HNAY	0	0.0
神津島	恩馳島	KZOB	4	18.2
	砂糠崎	KZSN	0	0.0
	砂糠崎X	KZSX	0	0.0
高原山	甘湯沢	THAY	0	0.0
	合計		22	100
	不可		4	
	総計		26	



第37図 洗島遺跡黒曜石産地推定判別図

第10表 洗島遺跡黒曜石測定強度

原石番号	判別図産地	iAl	iSi	iK	iCa	iTi	iMn	iFe	iRb	iSr	iY	iZr
洗島01	KZOB	189.65	1517.97	143.13	55.43	11.67	22.71	280.57	16.58	21.99	11.99	29.76
洗島02	SWHD	182.87	1470.14	188.05	42.66	7.80	22.08	198.88	32.61	11.70	13.72	27.16
洗島03	KZOB	156.19	1250.35	115.63	45.95	8.98	17.54	222.08	14.78	18.51	10.72	27.28
洗島04	不可	185.56	1461.09	318.11	53.59	7.54	20.17	175.13	34.68	10.62	14.24	24.37
洗島05	SWHD	185.00	1474.32	195.37	43.84	8.23	21.59	194.18	33.38	10.45	13.79	27.65
洗島06	SWHD	149.71	1201.69	156.55	35.26	6.27	17.46	166.12	29.75	9.25	15.52	23.97
洗島07	SWHD	156.81	1253.60	162.66	38.24	6.70	18.16	169.23	30.27	10.17	13.51	24.92
洗島08	不可	148.78	1181.51	157.43	46.98	8.90	17.30	212.46	13.24	16.11	9.40	24.34
洗島09	不可	166.29	1358.17	154.34	52.73	10.16	19.06	237.28	14.78	20.99	9.98	26.94
洗島10	SWHD	165.51	1342.93	180.75	40.39	7.39	19.97	184.83	31.59	10.73	14.11	25.43
洗島11	SWHD	161.75	1305.58	169.66	39.64	6.98	20.35	179.53	31.40	9.64	15.16	25.21
洗島12	SWHD	157.67	1235.48	169.92	38.90	6.67	18.79	172.06	30.70	7.85	11.95	24.86
洗島13	SWHD	174.64	1406.68	185.39	42.68	8.03	21.22	186.16	31.46	11.78	15.74	26.11
洗島14	SWHD	157.73	1246.49	166.86	38.56	6.91	18.54	170.65	30.96	10.18	15.05	23.94
洗島15	KZOB	179.61	1445.27	137.42	51.96	11.73	19.68	257.94	17.00	21.44	13.03	29.50
洗島16	SWHD	143.63	1126.61	148.26	33.67	5.96	16.73	157.44	28.80	10.02	14.23	23.89
洗島17	SWHD	193.87	1558.07	207.45	48.01	8.40	21.90	214.27	34.61	10.45	15.15	27.52
洗島18	SWHD	181.30	1449.68	189.25	43.65	7.63	21.24	197.54	33.36	11.36	13.78	24.91
洗島19	SWHD	186.66	1487.80	197.35	43.63	8.25	22.74	209.69	34.15	11.77	16.30	30.71
洗島20	SWHD	189.10	1526.62	209.55	48.54	9.13	22.30	209.70	33.87	10.79	14.49	26.29
洗島21	SWHD	162.67	1289.40	168.66	38.73	6.33	19.88	177.58	30.57	9.61	14.61	26.59
洗島22	SWHD	190.66	1538.28	221.04	46.26	7.96	22.92	207.86	36.26	12.39	15.82	28.69
洗島23	SWHD	160.12	1266.56	167.07	38.23	6.32	19.26	176.28	30.80	10.22	13.52	24.43
洗島24	SWHD	175.31	1414.81	184.91	41.33	7.66	21.30	190.02	33.26	10.27	15.53	27.20
洗島25	KZOB	153.82	1220.90	115.69	48.06	9.80	19.33	233.85	15.34	19.86	10.66	29.19
洗島26	不可	153.72	1234.73	172.42	51.15	9.51	19.05	222.59	13.67	18.13	9.60	24.71

第11表 洗島遺跡黒曜石推定結果

分析番号	器種	礫面 節理面	注記	推定産地	判別図 判別群	判別分析						
						候補1	距離1	確率1	候補2	距離2	確率2	
洗島01	剥片	—	古墳D区	黒灰色砂質土層	KZOB	KZOB	1.17	1.00	KZSN	22.50	0.00	
洗島02	剥片	—	古墳D区	黒灰色砂質土層	SWHD	SWHD	4.12	1.00	WDTN	106.63	0.00	
洗島03	剥片	—	古墳C区	黒灰色砂質土層	KZOB	KZOB	3.80	1.00	KZSN	29.91	0.00	
洗島04	剥片	○	古墳C区	表土(黒灰色砂質土層)	不可	不可	13.88	1.00	WDTK	76.93	0.00	
洗島05	剥片	○	古墳C区	北側表土	SWHD	SWHD	4.62	1.00	WDTN	93.28	0.00	
洗島06	剥片	○	古墳C区	SK-76	SWHD	SWHD	9.51	1.00	WDTN	74.29	0.00	
洗島07	剥片	—	F-6	SK-33 [SK-50]	不可	不可	SWHD	0.12	1.00	WDTN	80.35	0.00
洗島08	加工剥片	—	E-5	SK-36	不可	不可	KZOB	4.25	1.00	KZSN	23.53	0.00
洗島09	剥片	—	F-6	SK-50 [SK-18]	SWHD	SWHD	0.12	1.00	WDTN	82.29	0.00	
洗島10	石核	○	E-6	表土	SWHD	SWHD	5.44	1.00	WDTK	94.17	0.00	
洗島11	剥片	—	E-6-7	SK-50 [SK-18]	SWHD	SWHD	10.57	1.00	WDTN	69.26	0.00	
洗島12	剥片	—	E-7	SK-37 [SK-15]	SWHD	SWHD	8.71	1.00	WDTK	124.55	0.00	
洗島13	剥片	—	F-6	SK-126 [SB-1]	SWHD	SWHD	2.82	1.00	WDTN	81.54	0.00	
洗島14	剥片	○	F-7	SK-21 [SK-34]	SWHD	SWHD	10.60	1.00	KZSN	38.64	0.00	
洗島15	剥片	—	F-7	SK-21	KZOB	KZOB	2.97	1.00	WDTN	84.90	0.00	
洗島16	剥片	—	F-7	SK-84	SWHD	SWHD	4.90	1.00	WDTN	49.72	0.00	
洗島17	剥片	—	F-7	SK-111	SWHD	SWHD	4.27	1.00	WDTN	74.96	0.00	
洗島18	剥片	—	F-8	SK-14 [SX-1]	SWHD	SWHD	4.04	1.00	WDTN	102.16	0.00	
洗島19	剥片	—	G-7	SK-1	SWHD	SWHD	1.38	1.00	WDTN	65.31	0.00	
洗島20	剥片	○	G-7	SK-46	SWHD	SWHD	5.62	1.00	WDTN	106.09	0.00	
洗島21	剥片	—	H-10	SK-3 [風倒木]	SWHD	SWHD	3.17	1.00	WDTK	95.20	0.00	
洗島22	搔器	○	J-10	表土	SWHD	SWHD	1.55	1.00	KZSN	22.48	0.00	
洗島23	剥片	—	古墳B区	表土(黒灰色砂質土層)	KZOB	KZOB	2.96	1.00	KZSN	13.67	0.00	
洗島24	剥片	—	古墳B区	表土(黒灰色砂質土層)	不可	不可	—	—	—	—	—	
洗島25	剥片	—	古墳C区	黄灰色砂質土層	—	—	—	—	—	—	—	
洗島26	剥片	—	古墳C区	—	—	—	—	—	—	—	—	

※注意欄〔 〕内遺構名は、報告書掲載遺構名を示す。

望月明彦 1998「黒曜石の原産地を推定する 蛍光X線分析法」『文化財を探る科学の眼2 石器・土器・装飾品

を探る』国土社

池谷信之 2005『黒潮を渡った黒曜石 見高段間遺跡』新泉社

2. 火葬墓出土炭化材の樹種と放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薰

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・藤根 久・中村賢太郎

A. はじめに

洗島遺跡は、牛川町字洗島地内の標高約14mの台地上に位置する。調査では、縄文時代の竪穴住居跡や古墳時代の方墳、中世～近世の建物址や土坑が検出されている。このうち、中世の土坑は、火葬墓であり、燃料材の炭化材が良好に検出された。

ここでは、2基の火葬墓から出土した大型の炭化材の樹種同定を行った。なお、この同一個体の炭化材について加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

B. 炭化材の樹種同定

a. 試料と方法

炭化材試料は、火葬墓S Z - 1 (SK-50) と火葬墓S Z - 2 (SK-46) から出土した炭化材2試料である。いずれの炭化材も最外年輪のある試料である。なお、火葬墓S Z - 1 (SK-50) から出土した炭化材中にはタケ類も検出されている。

試料は、3断面（横断面・接線断面・放射断面）を5mm角以下の大さに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し銀ペーストを塗布した後、金蒸着を行った。観察および同定は、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製 JSM-5900LV型）を使用した。

b. 結果

火葬墓S Z - 1 (SK-50) から出土した炭化材は、常緑広葉樹のクスノキであった。この炭化材は直径約6.6cmの大型炭化材である。

また、火葬墓S Z - 2 (SK-46) から出土した炭化材は、常緑広葉樹のシイノキ属であった。この炭化材は、半径約9mmのミカン割り材であった。なお、厚み約1.7mmのタケ亜科の稈が含まれていた。その他、小片炭化材が多く含まれていた。

(1) シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 写真図版25 1a-1c (S Z - 2)

年輪の始めに中型の管孔が間隔を開けて配列し除々に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性である。

シイノキ属は、暖帯に生育する常緑高木で、関東以西に分布するツブラジイと福島県と新潟県佐渡以南に分布するスダジイがある。

(2) クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) Presl. 写真図版25 2a-2c (S Z - 1)

単独または放射方向に2個複合した中型の管孔が晩材に向い除々に径を減じながら散在し、周囲状柔組織と大きな油細胞が顕著な散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は单穿孔、内腔にはチロースとかすかならせん肥厚がある。放射組織は異性2細胞幅、4-20細胞高であり、油細胞が見られる。道管との壁孔は、大きくその孔口はレンズ状で配列は不規則な階段状である。

クスノキは、本州の関東以西・四国・九州の暖帯に生育する常緑高木である。材は精油分を含み耐水性・耐朽性・耐虫性に優れている。

(3) タケ亜科 *Gramineae subfam. Bambusoideae* イネ科 写真図版25 3a・3c (SZ-1)

厚み約1.7mmの硬質の稈の一部である。稈の中心部は中空である。維管束は不整中心柱で多数が同心円状に均質に配置している。維管束は向軸側に原生木部、その左右に後生木部の2個の管孔、背軸側に節部がある。維管束の周りは厚壁の纖維細胞からなる維管束鞘が帽子状にある。

タケ・ササの仲間で12属が含まれ、中国や東南アジアから移入され栽培により広まったものが多く。ササ類は多くの野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があるといわれる。

C. 放射性炭素年代測定

a. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第12表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第12表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-9304	遺構:SZ-1火葬墓 グリッド:E-6	試料の種類:炭化材(クスノキ、4年輪分) 試料の性状:最外年輪 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-9305	遺構:SZ-2火葬墓 グリッド:E-6	試料の種類:炭化材(シイノキ属、5年輪分) 試料の性状:最外年輪 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス

b. 結果

第13表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第38図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%

であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

第13表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-9304	-26.26 ± 0.14	341 ± 18	340 ± 20	1490AD (24.3%) 1530AD 1550AD (43.9%) 1630AD	1470AD (95.4%) 1640AD
PLD-9305	-25.36 ± 0.19	350 ± 17	350 ± 15	1480AD (32.1%) 1530AD 1570AD (36.1%) 1630AD	1460AD (43.2%) 1530AD 1550AD (52.2%) 1640AD

c. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それより確かな年代値の範囲が示された（第38図）。

その結果、火葬墓S Z - 1 (SK-50) から出土した炭化材(PLD-9304)は、 2σ 暦年代範囲において1470–1640 Cal AD (95.4%) であり、15世紀後半～17世紀中頃の年代値を示している。

また、火葬墓S Z - 2 (SK-46) から出土した炭化材(PLD-9305)は、 2σ 暦年代範囲の高い確率において1550–1640 Cal AD (52.2%) であり、16世紀中頃～17世紀中頃の年代値を示している。

両者の年代測定値がほぼ同じであることから、火葬墓の時期は、火葬墓S Z - 2 (SK-46) から出土した炭化材(PLD-9305)の暦年代が示す16世紀中頃～17世紀中頃と考えられる。

参考文献

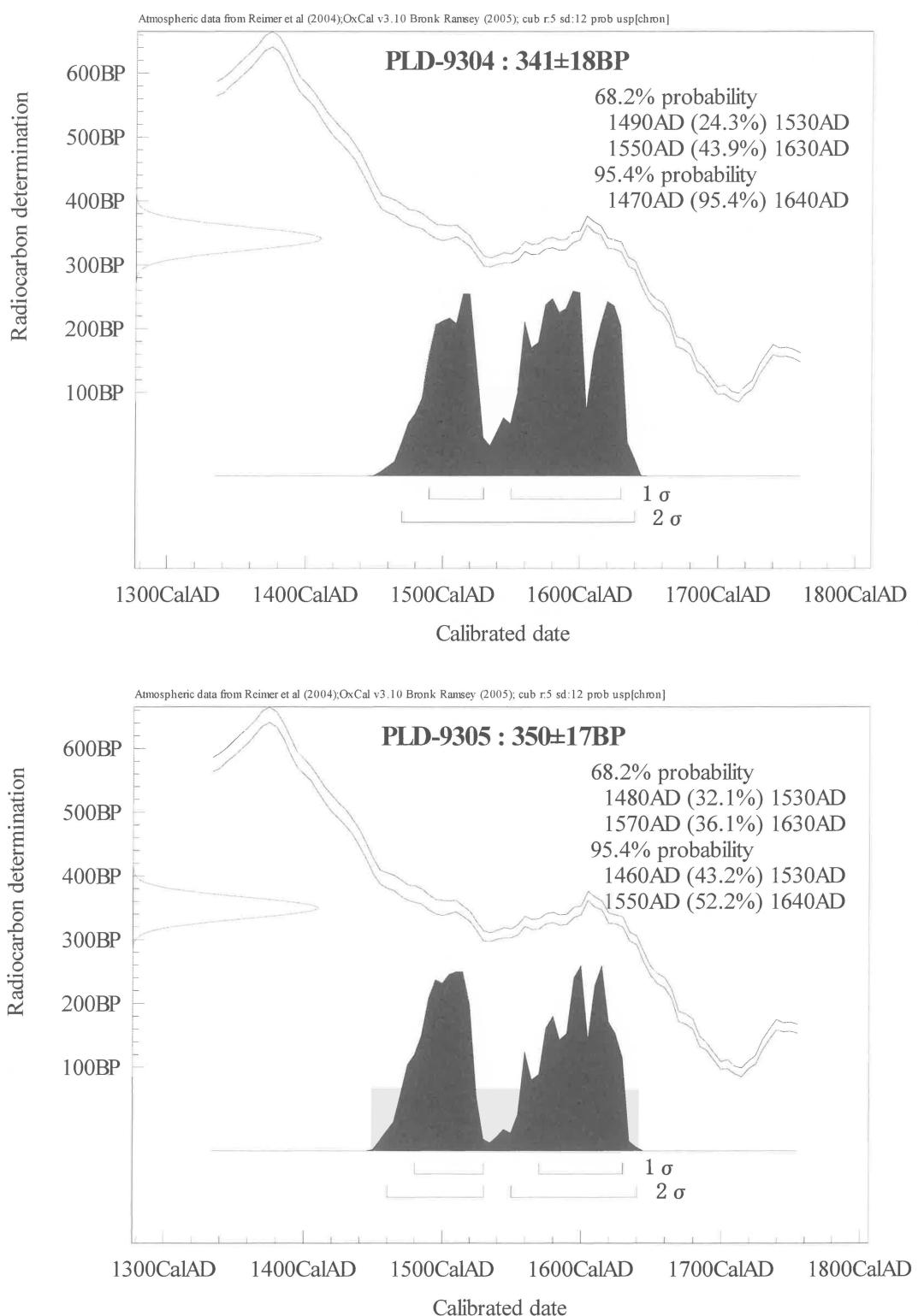
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代. 3-20.

Ramsey, C.B. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Ramsey, C.B. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E.,

Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hoog, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmle, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第38図 火葬墓炭化材の曆年較正図

写 真 図 版

写真図版 1

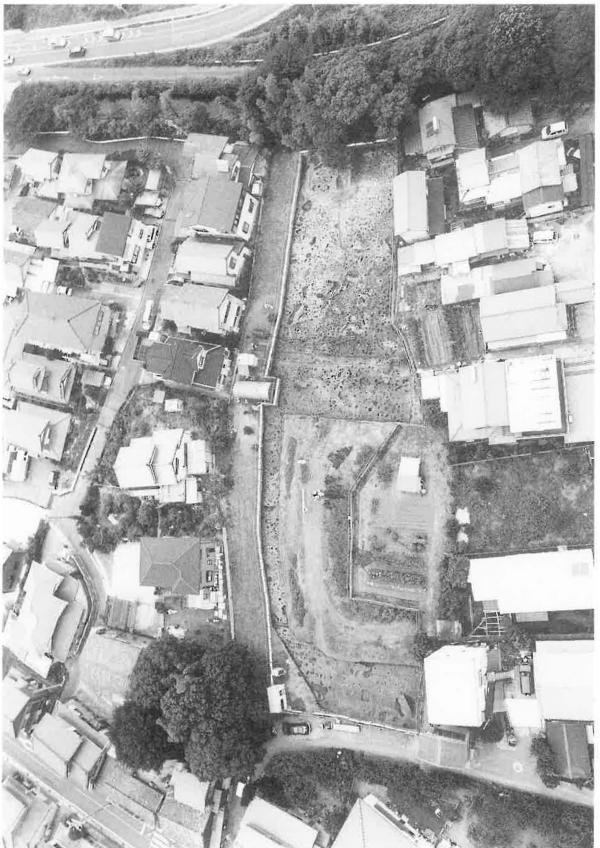


1. 調査区全景（南東から）



2. 調査区全景（北西から）

写真図版 2



1. 調査区全景（北東から）



2. 調査区北側部分（北東から）



3. 調査区南側部分－1（北東から）



4. 調査区南側部分－2（南東から）

写真図版 3



1. SB-1全景（南東から）



2. SB-2・3全景（北西から）

写真図版 4



1. SB-4全景（北から）

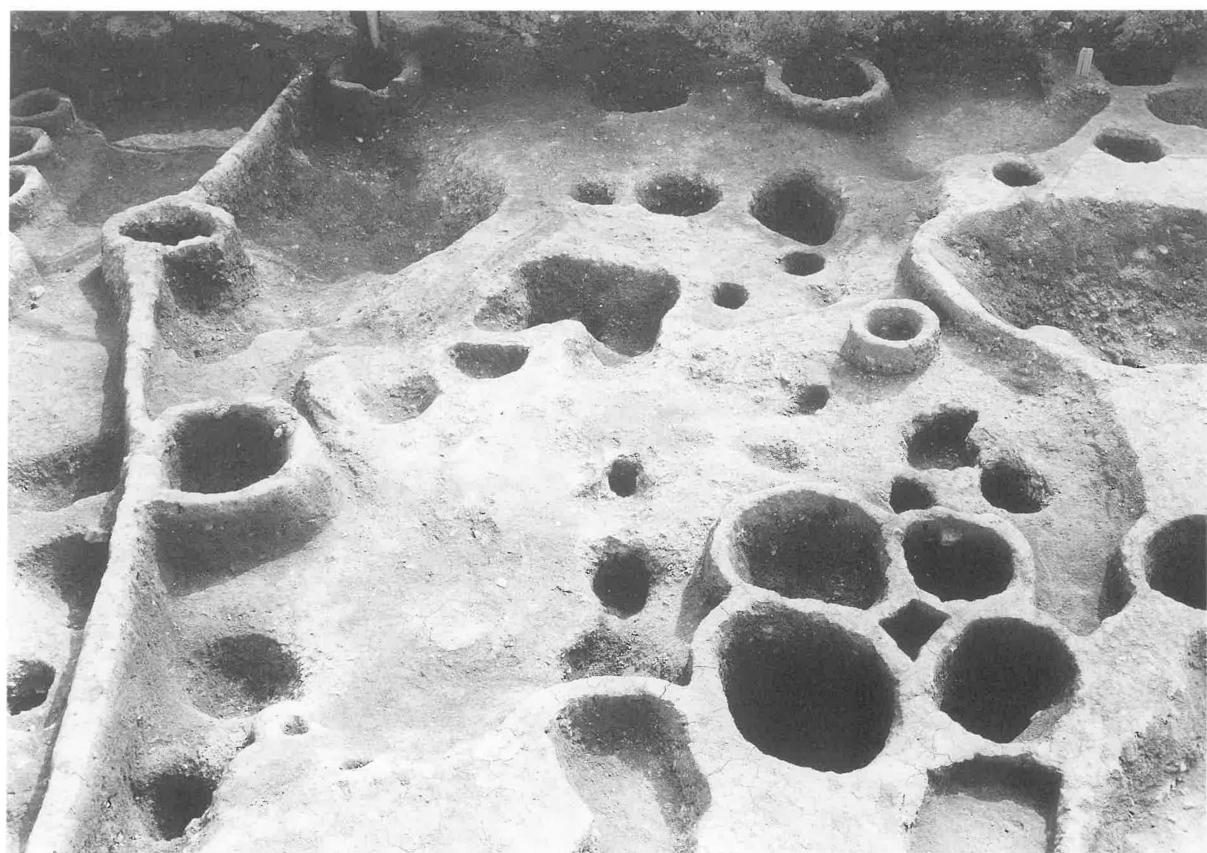


2. SB-5全景（南東から）

写真図版 5



1. SB-6全景（北から）



2. SX-1北側部分（東から）

写真図版 6



1. SK-1遺物出土状況（北から）



2. SK-1全景（南東から）

写真図版 7



1. SK-2遺物出土状況（北から）



2. SK-2全景（北西から）

写真図版 8



1. SK-14全景（北から）



2. SK-15全景（南東から）



3. SK-17全景（北東から）



4. SK-18全景（西から）

写真図版 9



1. SK-30全景（北東から）



2. SK-35全景（南東から）



3. SK-47全景（東から）



4. SK-52全景（北西から）

写真図版10



1. SZ-1遺物出土状況（北から）



2. SZ-1全景（北から）



3. SZ-2遺物出土状況（北西から）



4. SZ-2全景（北西から）

写真図版11

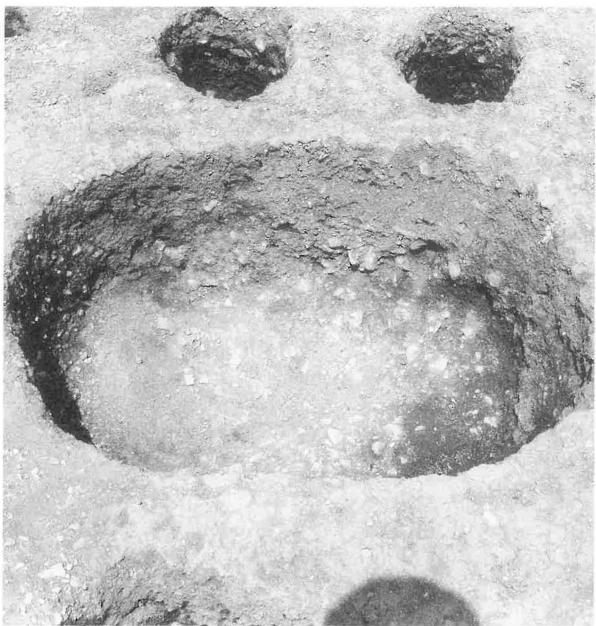


1. SZ-3全景（北西から）



2. SX-2全景（北から）

写真図版12



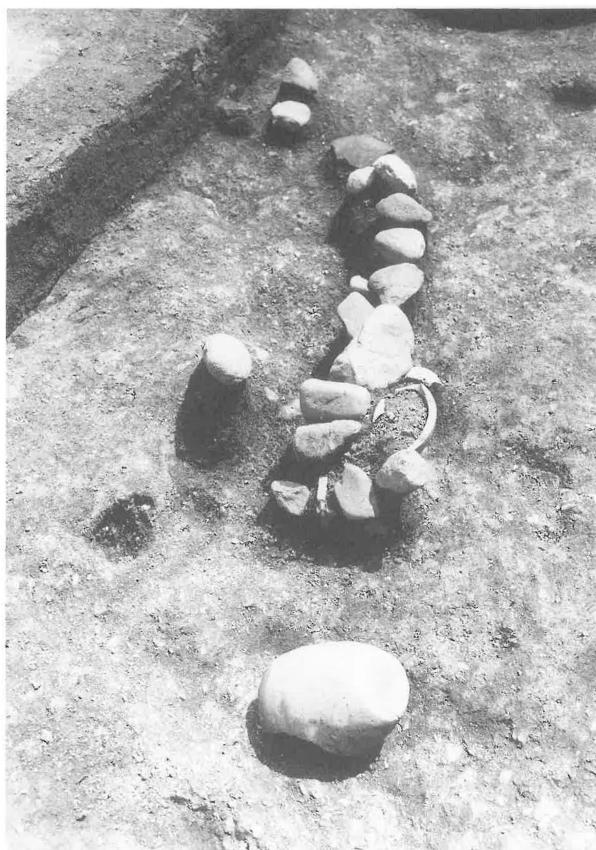
1. SB-12・P2全景（南東から）



2. SB-17・P7・P9全景（東から）



3. SK-59全景（北西から）

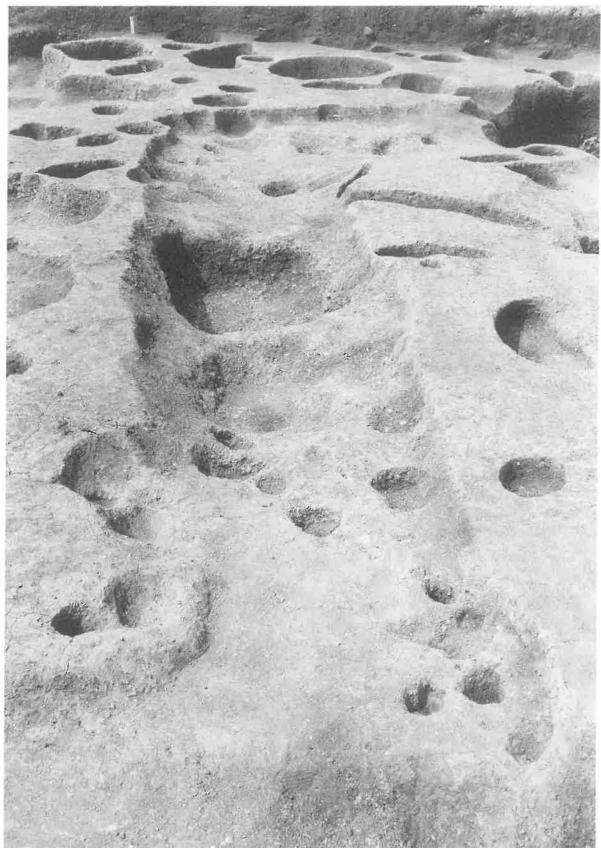


4. SD-1遺物出土状況（北から）

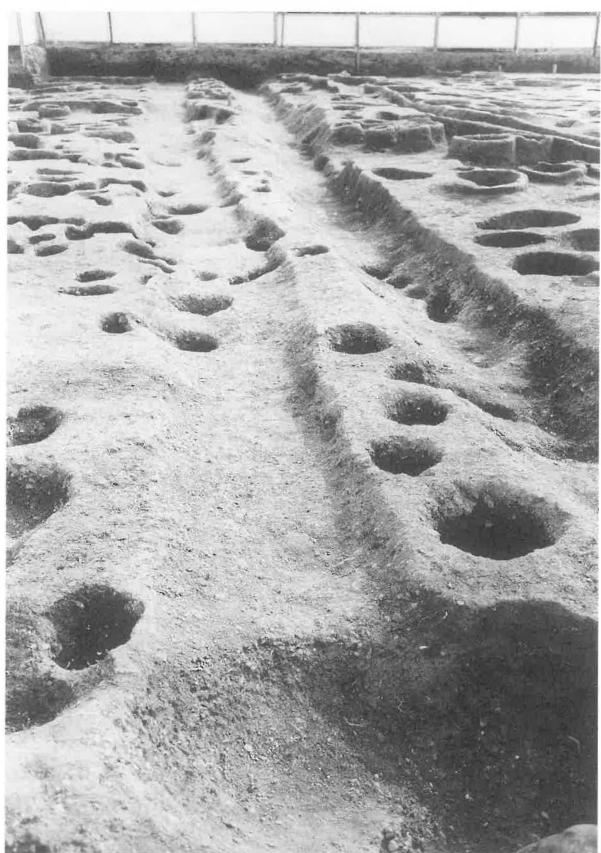
写真図版13



1. SD-1南側（南西から）



2. SD-5南側（北東から）



3. SD-7・8全景（北東から）



4. SD-11全景（北から）

写真図版14



1. 洗島 1号墳調査前全景（南東から）



2. 洗島 1号墳墳丘断ち割り後全景（西から）

写真図版15

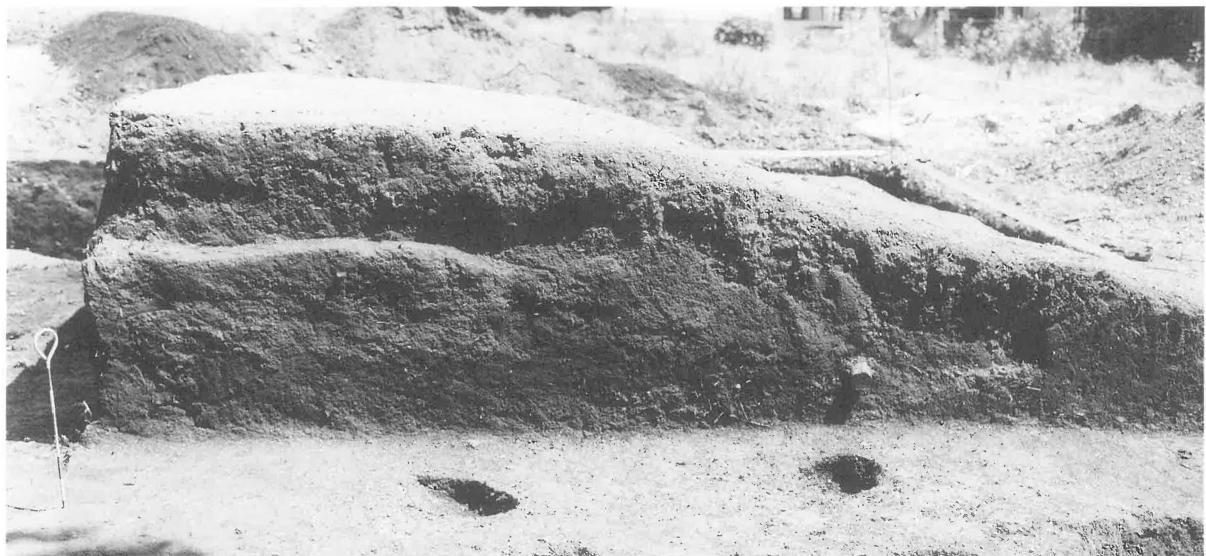


1. 洗島 1号墳墳丘断ち割り後全景（南から）



2. 洗島 1号墳完堀後全景（西から）

写真図版16



1. 洗島 1号墳南側墳丘断面（北西から）



2. 洗島 1号墳北東墳丘断面（南東から）



3. 洗島 1号墳南西部墳丘断面（北東から）

写真図版17



1. 北東側周溝全景（南東から）



3. SK-62遺物出土状況（東から）



4. 風倒木痕-1（西から）

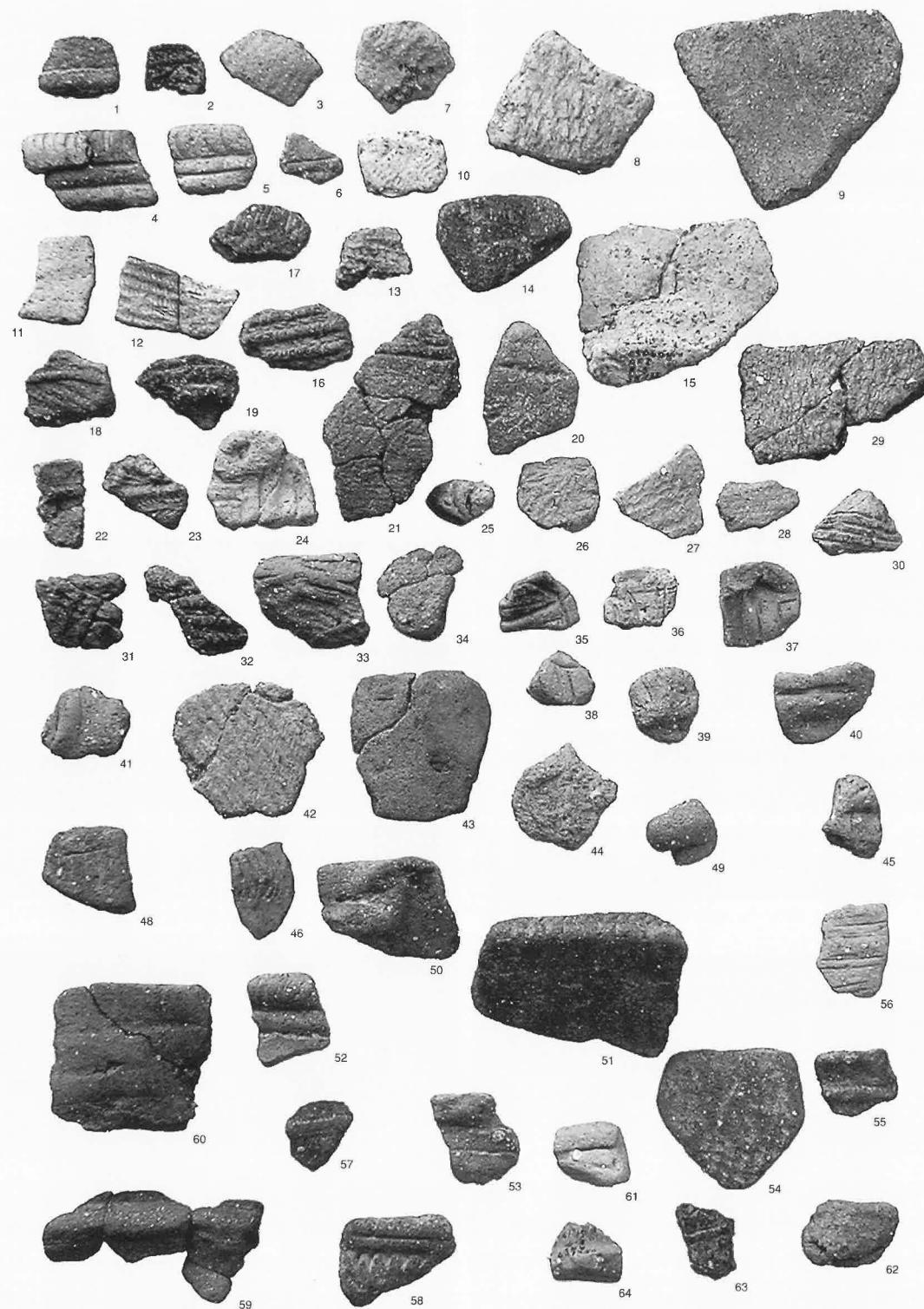


2. 南東側周溝全景（北東から）



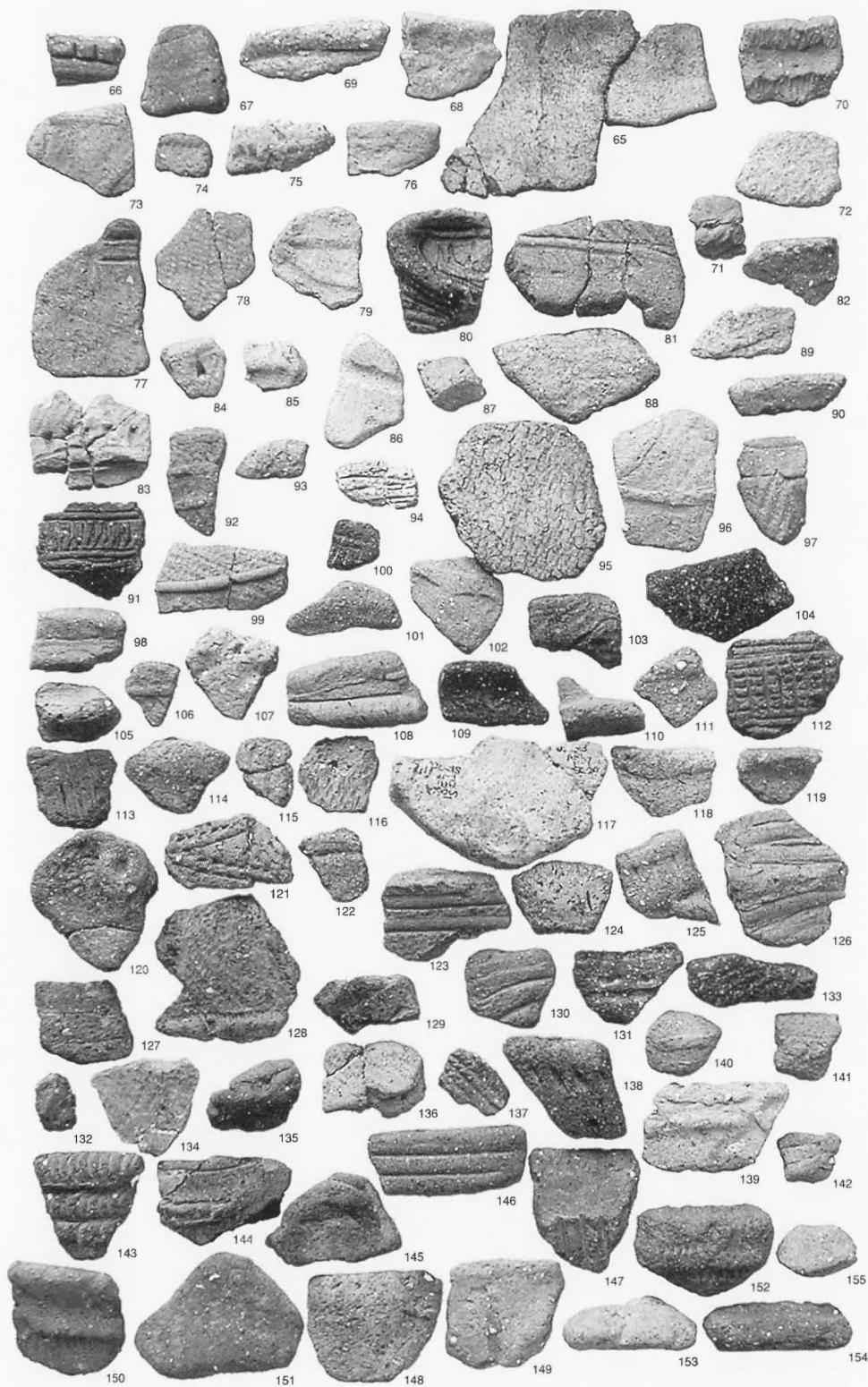
5. 風倒木痕-2（北東から）

写真図版18



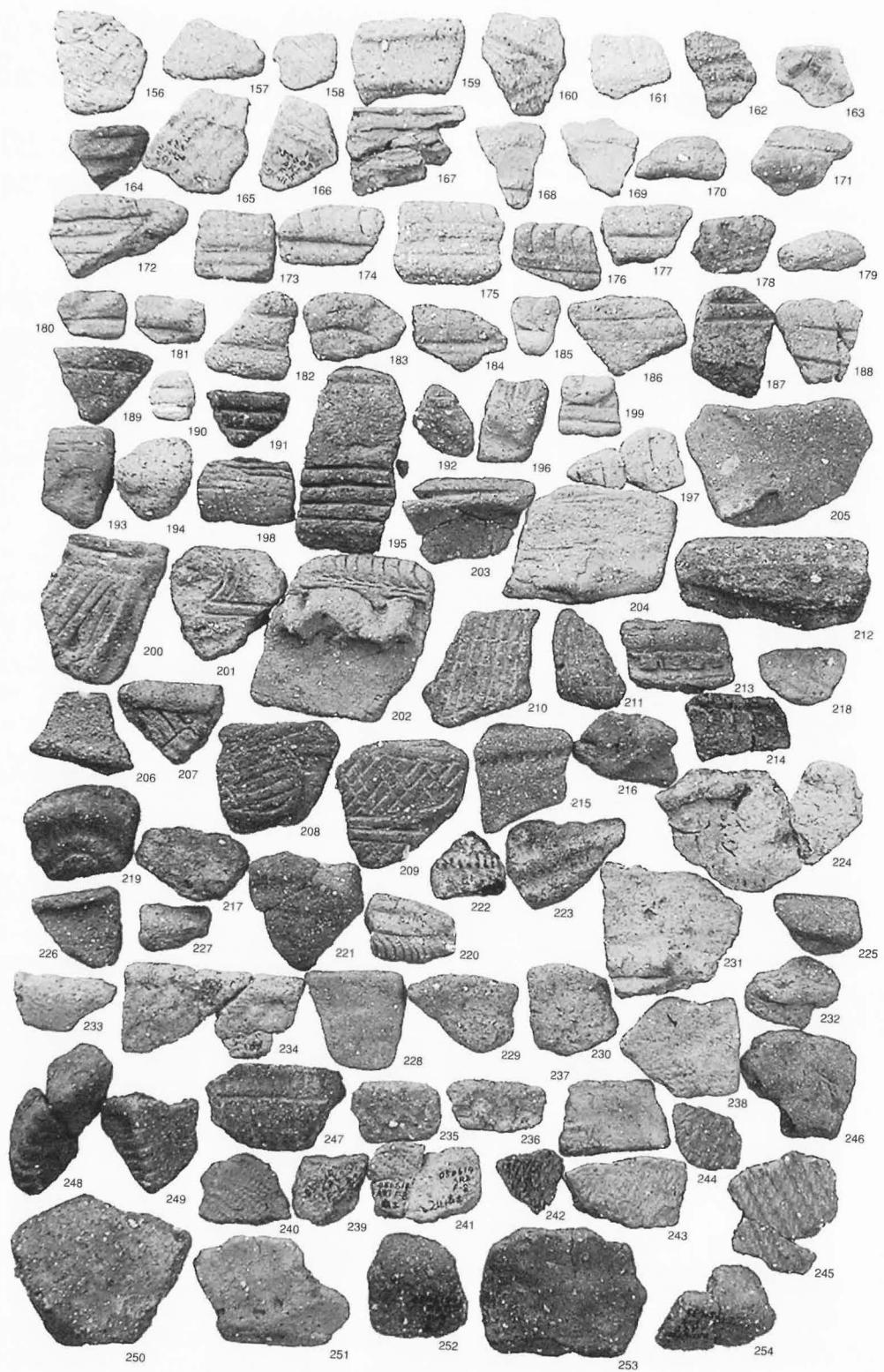
縄文土器一

写真図版19



縄文土器一 2

写真図版20



縄文土器一 3

写真図版21



47-1



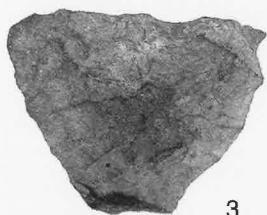
47-2



1



2



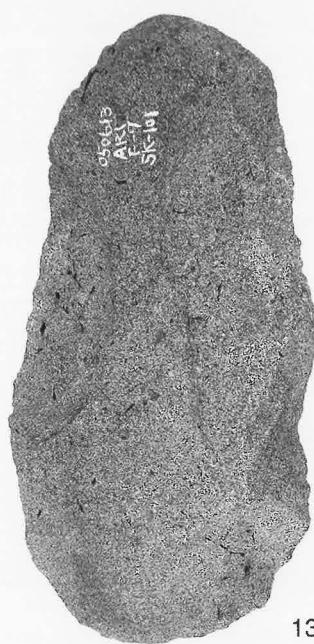
3



14



15



13

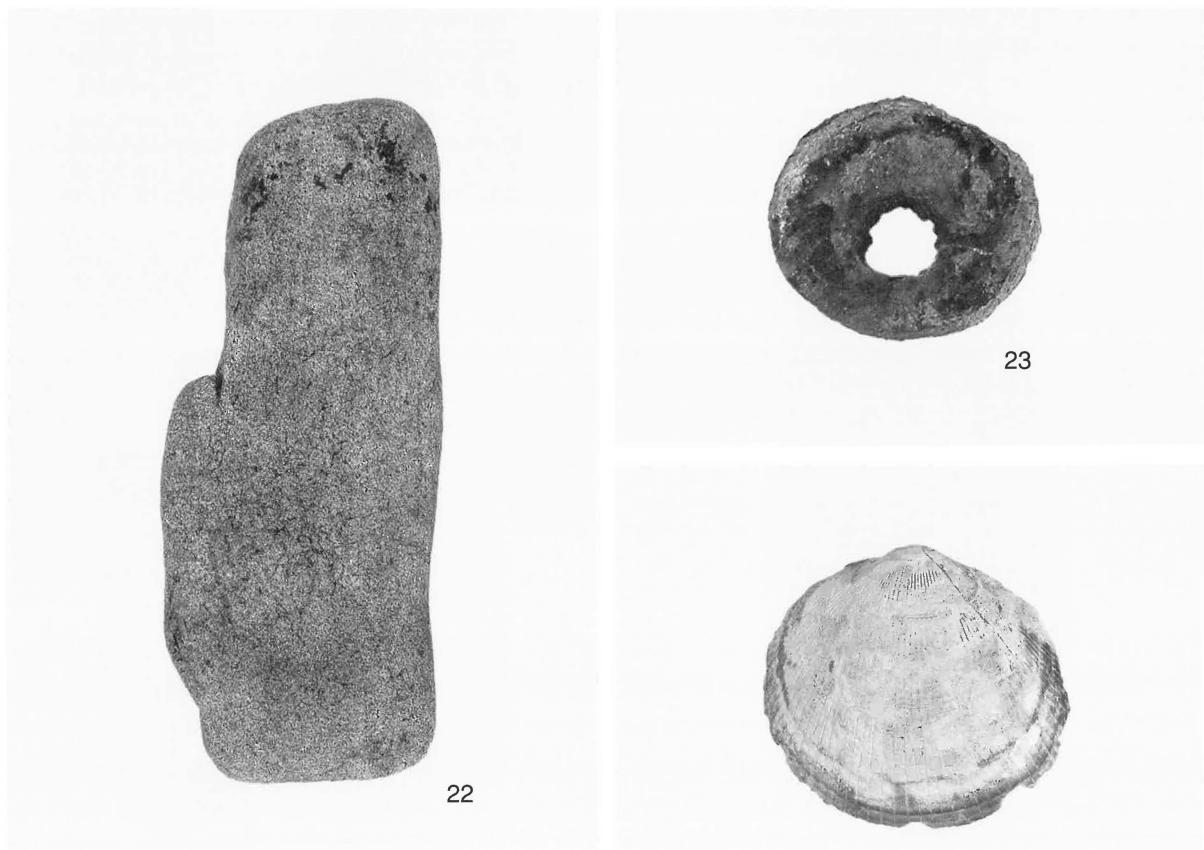
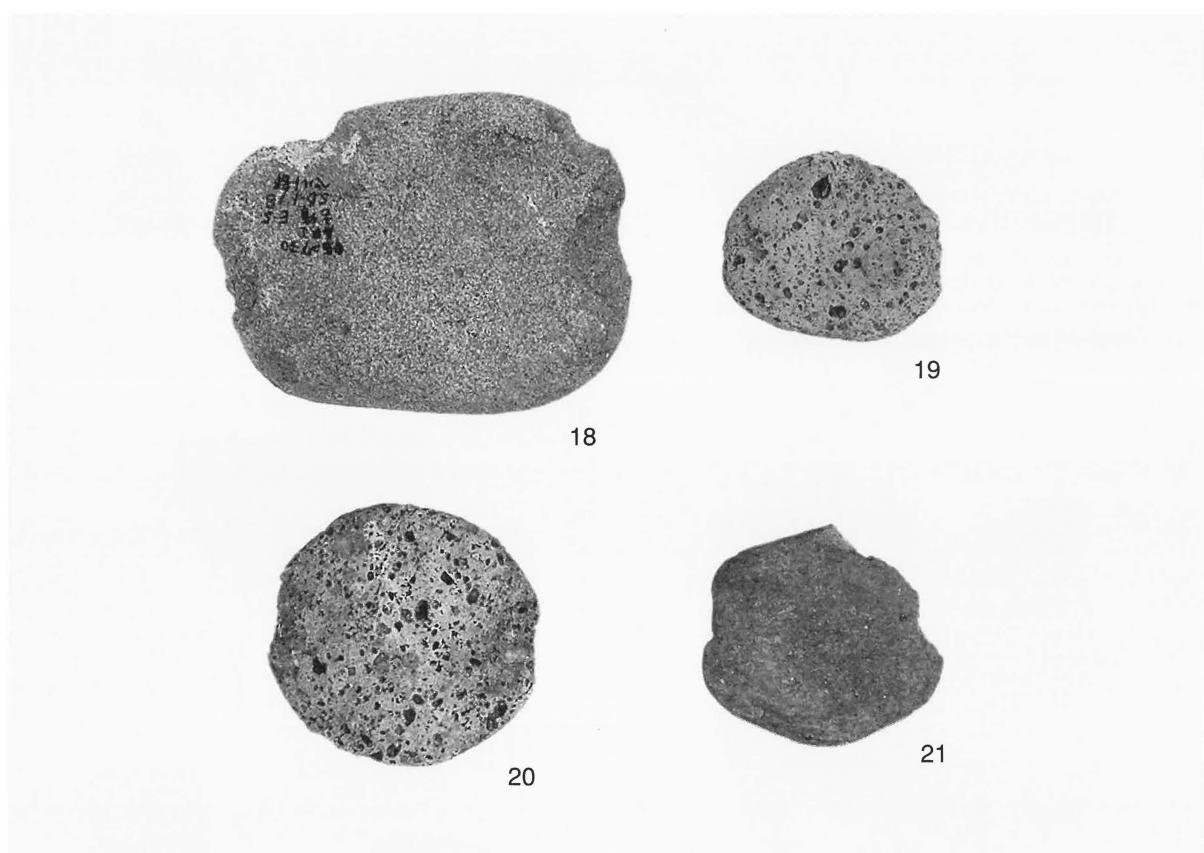


16



17

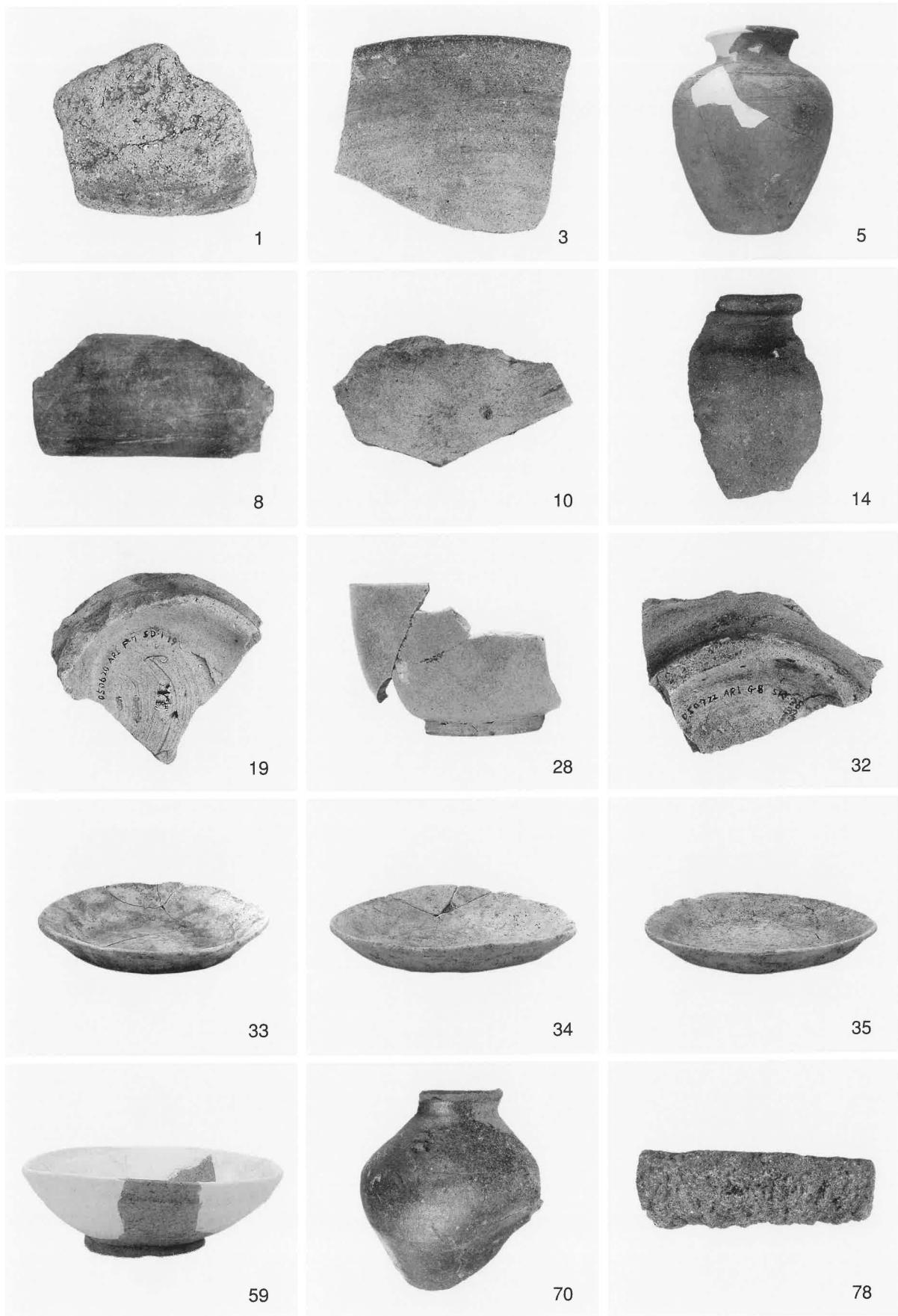
写真図版22



S K-18出土タマキガイ

石器－2・動物遺体(貝類)

写真図版23



弥生時代以降の遺物

写真図版24



1



2



3



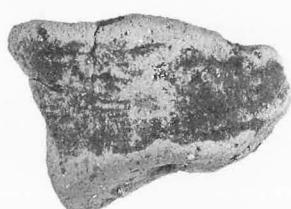
4



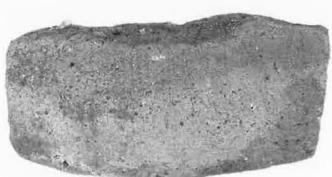
5



6



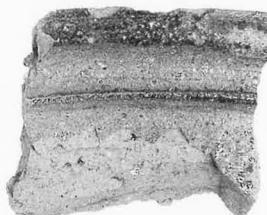
7



8



10



17



20



25



27



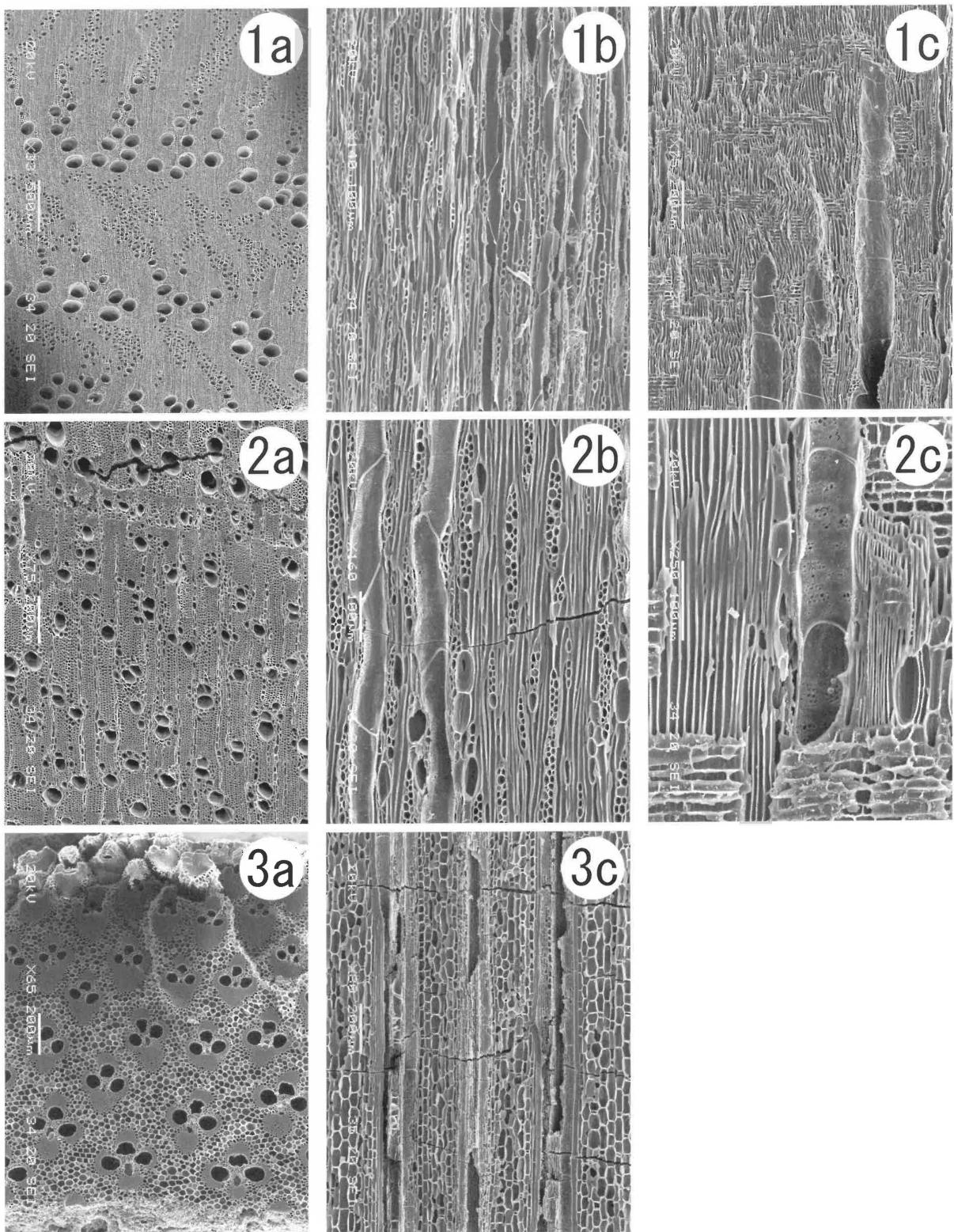
鉄器1



鉄器2

洗島1号墳出土遺物

写真図版25



炭化材の走査電子顕微鏡写真 (a : 横断面, b : 接線断面, c : 放射断面)

1a-1c. シイノキ属 (S Z-2) 2a-2c. クスノキ (S Z-1) 3a・3c. タケ亜科 (S Z-1)

報告書抄録

ふりがな	あらいじまいせき・あらいじまいちごうふん							
書名	洗島遺跡・洗島1号墳							
副書名	牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第95集							
編著者名	岩瀬彰利、岩原剛、池谷信之、(株)パレオ・ラボ							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0801 愛知県豊橋市今橋町3番地の1 TEL0532-51-2879							
発行年	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東經 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
あらいじまいせき 洗島遺跡 あらいじまいちごうふん 洗島1号墳	とよはしうしくわちょう 豊橋市牛川町 あざあらいじま 字洗島	市町村 23201	遺跡番号 79367	34度 46分 43秒	137度 24分 51秒	20050509 ～20050730	1,300m ²	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
洗島遺跡	集落遺跡	縄文	竪穴住居、土壙等		縄文土器、石器等		縄文時代前期後葉 ～中期中葉を中心とした集落及び古墳時代中期の方墳。	
洗島1号墳	古墳	古墳	掘立柱建物、火葬墓、溝、土壙等		中世陶器、陶器、磁器、土師器、銭貨等			
			墳丘（一辺8.4m）、周溝		土師器、鉄器			

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第95集

洗島遺跡・洗島1号墳

牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2008年3月31日

発 行 豊橋市教育委員会©
美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1

印 刷 共和印刷株式会社